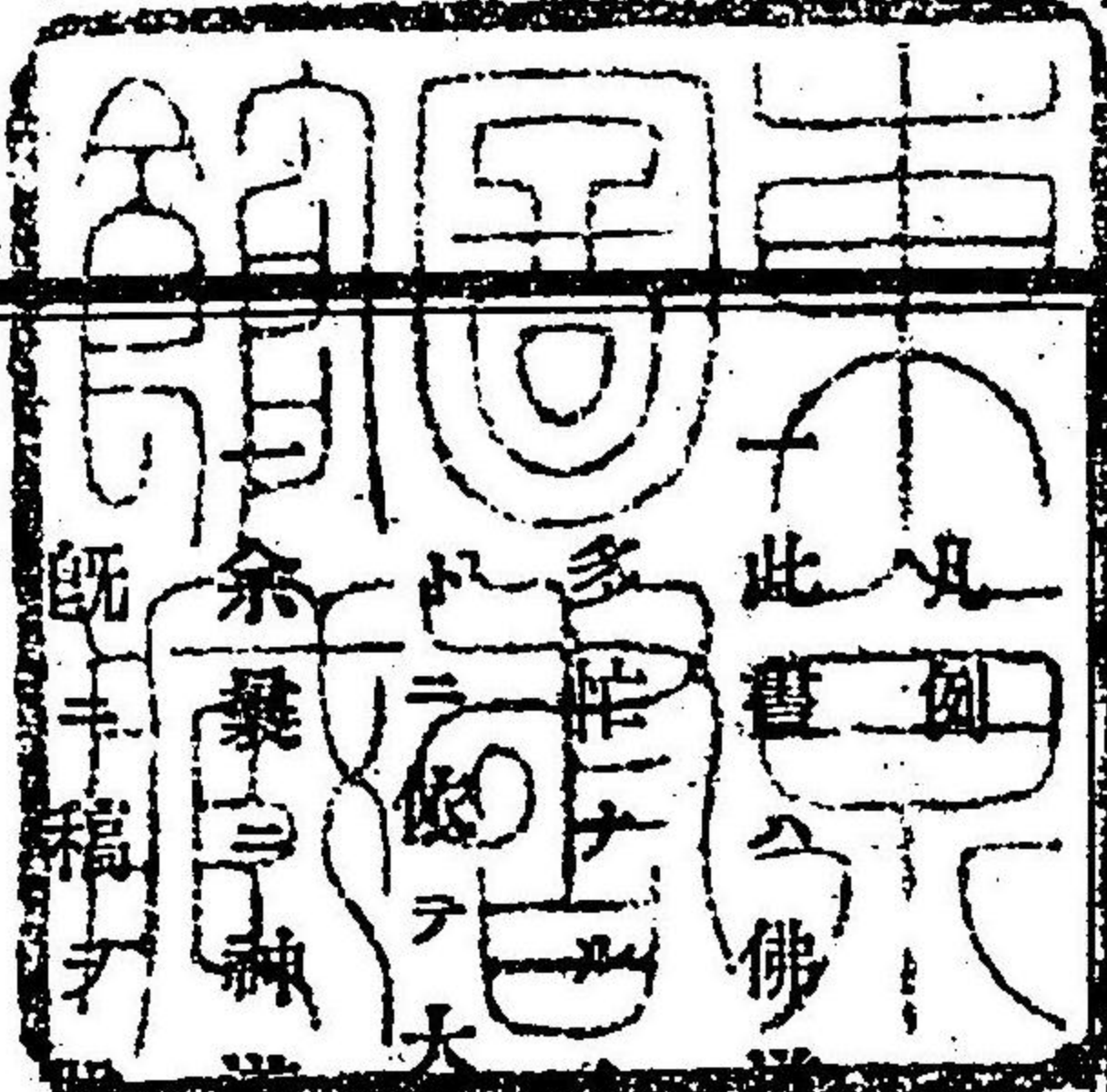


明治十九年三月二十四日 内務省贈付



管見

大意ニ尋テ直ニ脱稿ノ意算ナリシガ事務ノ
 起草后英國宣教師某ノ校正ヲ仰ギシガ爲メ
 多ク修正ナリシニ依テ大ニ出版ノ期ヲ過リシ段
 看者宜ク之ヲ恕セヨ
 余曩ニ神道大意ヲ記シ尋テ佛道大意ヲ著シ今復
 此書既ニ稿ヲ脱ス此レ只ダ世ノ文字ニ熟セザル
 人ノ爲メニセント欲スルノミ故ニ辭字論態ノ如キハ
 務メテ平易解レ易キヲ主トス

一此書ハ當時文明諸國ニ專ラ行ハル、所ノ真教ニ基テ述
 作セシ者ナリ然レモ此レ其一端ニ過ギズ真教ノ深旨妙
 理ノ如キハ一小冊子ノ能ク盡ス所ニ非ズ又タ素ヨリ劣
 才淺學ノ庶幾スベキ所ニモ非ズ若シ其深旨妙理ヲ探ラ

ント欲セバ神示ノ兩聖書アリ諸大家之レガ註釋ヲナス
 アリ就テ玩味セバ違ハザルニ庶カラン矣
 一此書ヲ別テ上下二卷トシ今回其上卷ノミヲ出版ス此篇
 ハ世ニ無神論ヲ主張スル者アリ又々有多神說ヲ信ズル
 者アルヲ以テ是等ノ中間ニ立チ一神ノ存在及ビ其性質
 ヲ天下諸國古今ノ聖賢學士ノ說ニ因リ論述セシ者ニシ
 テ看者一讀セバ獨一眞神ノ存在ヲ知ルニ足ラン然レモ
 眞神ノ聖旨ハ救世主ニ依ラザレバ窺フ能ハズ故ニ下卷
 ハ專ラ眞神ノ降シ給ヘル救世主ノ事ヲ記述セントス故
 ニ此篇別ツヲ二ツト爲スト雖モ其旨意ノ如キハ相連貫
 接續シテ偏廢ス可カラザル者ナリ
 明治十八年十月廿七日
 水野功謹識

耶穌教大意上卷

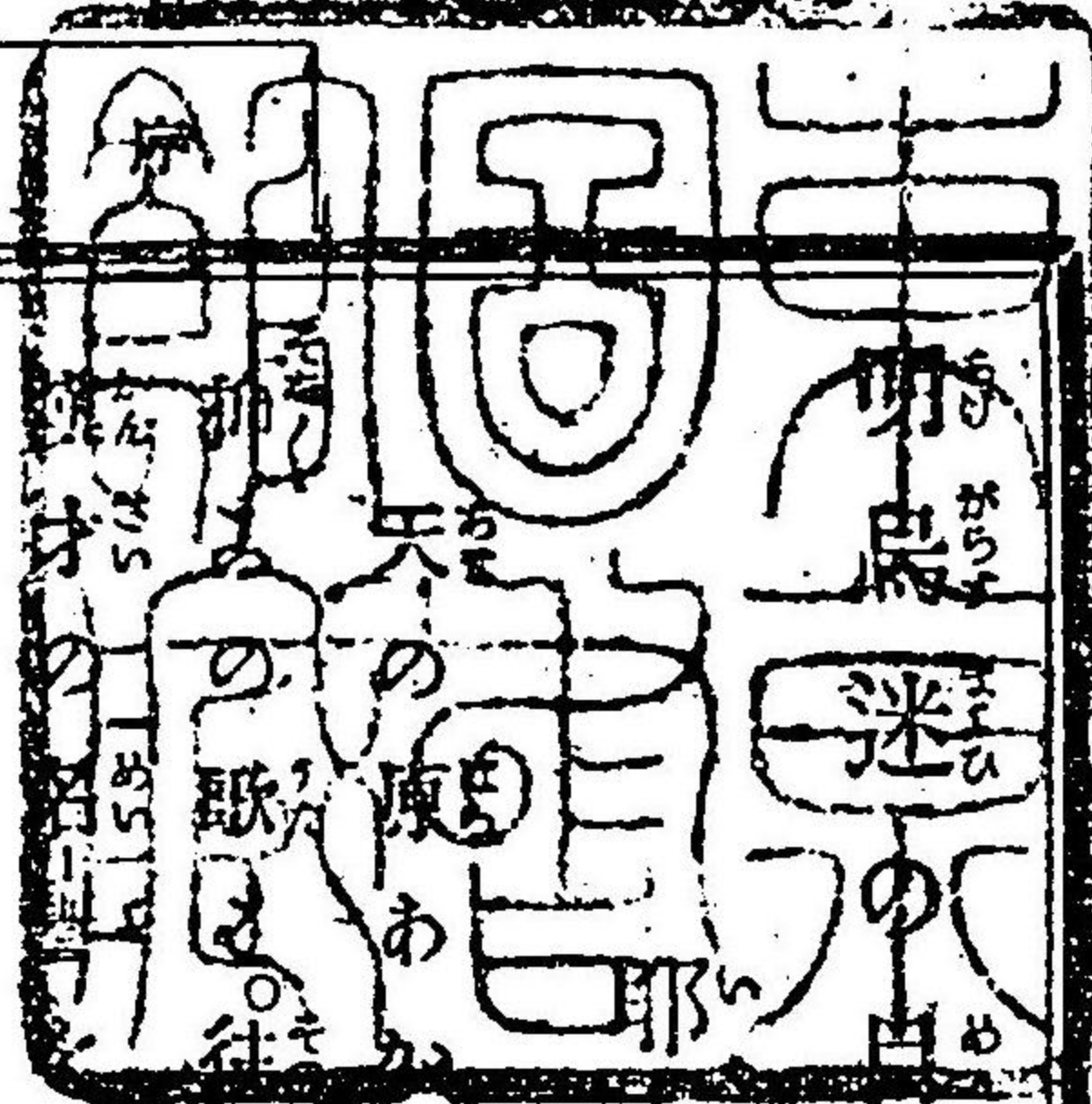
目錄

第一	序論
第二	宗教の必要を論ず
第三	世間の評する所皆眞意を誤るを論ず
第四	凡そ事物の善惡を知るの其基本に依て知るべきを論じ耶穌教の宗基を示して本論に入る
第五	凡ての事物に於て其有無決して
第六	萬物を以て神の
第七	古今聖賢學士の說を擧て神の存在を論ず
第八	神の性質及び其有様を論ず先づ神の唯一あるを論ず

信せり
 水野功謹識

持18
868

論



耶穌の福音
天の原
光威を稱讚
照せども
あて
驕侈の淵
未の浮沈
ころ

光威を稱讚られし物にして世の始より天日の光之四方を
照せども光を感ふ世人の暗心のうを玉の暗お黒あす而已
あて貪婪利慾の雲霞傲慢不遜の障屏お我良心を塞らきて
驕侈の淵や淫佚の浮瀬を己が住居とし處得顔に流る行きの
未の浮沈はかにかくお出来し源の何處ぞ尋る違の有を
ころ道あさ岐に迷つと暗路をたどる替者おて導き誘なふ

耶穌教大意

醒

- 第九
- 第十
- 第十一
- 第十二
- 第十三

神の無始無終
神の無形質あるが故
無情欲あるを論ず
天下萬國古今の興廢存亡お就て神自の
存在を示し以て其公義を顯し給ふを論ず
罪惡の本原及び其攝理を以て
神の全智全能を論ず
救道に依て神の仁愛
慈悲あるを論ず

以上

見之為
 哀節に
 哀包汗
 者未
 有

其人も亦盲人なる世風之哀と云も愚あり。然と夜も既更行て。差出る光さへ涉り。隈みく照す眞光。眞の道を知得の。皇天上帝の聖恩。幽暗と死陰。住者も迷ふ暗路を疾去て。甚平康けき大道。出べき時。今日なるを。猶頑固に沈居て。迷の中に住の江の。其善惡も浪華。た定あき世の風潮。波瀾邪説。迷誤の宗。教海。歸着る。ぎさの浮草を。のき除き。つと飛弾人の。打墨。細み有ね。せも。唯一筋の大道へ。生田の森の。幾度か。繰返し。つと筆執て。趣向方を。あるべせん。借も國吉の例の如く。机。お寄り。一卷の聖書を。披き。鎮思。默讀。虚心。平氣に。只管。神の聖旨の如何。すと。研究。勉勵の際。誰やらん。音信者。れ有けれ。ば。應と。答て。外方へ。立出。み。色。ば。別人。あらず。無二の。朋友。和。市。あ。き。ば。國吉も。最喜の色。を。現。とし。善。ころ。來。せ。り。率。先。此。方。へ。

と坐に着せ。互に平康を祝つと四方の話も盡ぬれば。和。市。は。國吉。お。向。ひ。和。さ。て。國。君。先。日。より。段々。神。佛。兩。道。の。御。話。を。承。り。私。も。大。お。悟。所。有。ま。し。た。故。常。に。友。人。や。他。人。に。還。時。は。君。より。承。は。り。し。事。を。話。て。聞。せ。ま。す。此。間。或。人。の。所。へ。參。り。種。々。の。話。の。末。終。お。宗。旨。は。話。お。始。り。イ。ヤ。神。道。の。何。じ。や。彼。じ。や。佛。法。の。是。の。非。の。と。云。ひ。耶。蘇。教。の。善。の。惡。の。と。例。は。知。も。せ。ぬ。事。を。知。顔。お。云。て。居。ま。し。た。が。御。承。知。は。通。り。私。の。一。向。に。不。學。で。何。を。是。何。を。非。と。も。定。め。か。ね。ま。す。何。卒。先。日。御。約。束。あ。さ。ま。た。彼。耶。蘇。教。の。御。話。を。願。ま。す。隨。分。此。頃。之。耶。蘇。教。の。事。を。世。間。で。喋。喋。と。申。ま。す。と。其。道。に。入。て。能。聞。ま。せ。ぬ。何。も。其。善。惡。を。決。する。事。の。能。ま。せん。故。お。何。卒。單。簡。に。了。易。き。や。う。御。話。を。願。ま。す。回。如何。お。も。當。節。の。我。國。お。於。ま。し。て。餘。程。大。切。

なる時機と思ふす何なれを全体世に宗旨の有る爲何でせ
う。古より聖人君子の世に現れ諸の賢者の我々汲々として
道を講せらる。深淵に臨み如く。薄氷を履み如くして。懼れ謹
で身を修め。讚嘆愛戀して道を慕れたるの何故で有ませう
之必ず爲ねを成ぬ由縁が有からで御坐ませう。然に今世を
觀ますれを何なる人の徳を尊び義を重て居ますか。何ある
道が今世に行きて有ますか。神道です乎。儒道です乎。又は佛
道です乎。私と思ふするお神道も儒道も佛道も行れて居ぬ
と存ます。是を譬て申さる。恰好彼の蝸牛の空貝が壁に附て
居ると同様で人之を其外形より見るときは壁に附て居る故
に生て居様に見ますなれを手に取て中を見れを其中に身
が有ませずして空でそ。此と同く我國は外鏡を見るときは。神

儒佛就も其門を競ひ。美事盛大を極たるが如く見ますを。ど
其中を開て觀を緊要なる實が有ません。即ち其道々の尊ぶ
べき徳と重す可き義が失て徒らお其外形の儀式や虚禮の
みが存するを申ので御坐ます。兎角人が口を開て文明とか
開化とか申ますと。道義地に落徳行を重せぬあら。其之歐
の文明と云畜類の開化と云も敢て過言には有ますまい。亞
聖孟子も飽食暖衣逸居して教ある禽獸に近しと謂れま
した。斯の如き有様を正くして眞に人間社會と成し。一身よ
りして一家一家よりして一國あ及し。眞の文明に導き化す
る之之實に宗教は預り負所の任で御坐ます。凡宗教は社會
道徳に腐敗を止る鹽の如き物です。故に宗教有て社會の道
徳は眞に立ます。然とも其宗教が不完全なるときは。決て

道徳を有とが能ません。其故に如何ある教と雖も若道徳を
保存するるとが能ぬら其は不完全なる明証據です。目下
我國に於て最も必要ある物は宗教に於て。恰も病者の醫に
於て如です。和成程御尤で御坐ます然に此頃世間の評論を
聞かすする。耶穌教は全く無道理にして邪宗と相違なく。眞
に悪き教とや其証據を先第一に是迄の神佛と偽で何でも
なく故に一向難有も何とも無と云。御先祖様をも祭す。父母
や親類れ者も死でも焼香吊祭もせず。所の鎮守産神の祭禮
が有ても其も加入せず。殆ど以前の穢多の如く。第二には
世間の交際酒も飲ず遊興にも行かず。而てマア堅固い事而已
を云て。所謂頑愚ある爺嬪の如く。實に任方は無者とあり。其
では世間が濟ぬから斯せい彼せいと親が云ふ。友朋が異

三 第
世間の
評する
所皆眞
意を誤
るを論

見を爲やうの中々承知せず。只眞神々々と而已云て。親も背
ても親類れ氣も入るくても何でも彼でも眞の神様にさへ
従ふ善と云て居ます。成程斯様に聞て觀を。餘程頑固ある
者で。是迄固り法華とか門徒物知すとか申ましたより。未
々強者で。人間も既斯様お爲ては彼の人の倫の道も立す。又世
上の樂も無あつて終います。故に耶穌教は異人れ宗門で。邪
教とや切支丹とやと申して居ます。併し先日申通り。賢い
文明國に似合ぬ事にて。君より一寸承たりました事とは。天
地は違です。如何でせう。左様で御坐ます世間の評論も
一通は尤れ如に見ます。而て御説れ通り先日一寸申上し事
とは先反對れ如く思召せう。是には甚だ深き道理の有
まゝて必ず一々不審を駁して疑を晴し理非を辨別せぬ。成

聖なる者と云ふ何れも其神の在と云ふ証據の有すやい目
 お見あひし者を在と云れても私共の承知さるやせん其故
 お在と云ふ如く有る者あると又無と云ふ如く無にも成ます畢
 竟是れ其人々の心の持やう一で何でも成様お思ます私と
 ても矢張其通で眞實心に深考て觀ますれと有とも無とも
 極る事お能ません誠存在あるを誰人も必ず信心せねと
 成ません事です又無とさる實に痴氣た解で恰好彼小兒
 お遊事を爲のか或狂者の所作事のやうある者で無益な事
 です何も昔から神を見たと云人も無誠お有る者少し目
 お見るか何乎著るしと思議でも有て私共にも判然と知
 れるふある者です其が無のを觀て何れも有ると思れませ
 ん好や有あした所お是迄知あんだ神です故敢て此方おら求

第五

凡ての
 事物に
 其有無
 決て兩
 立すべ
 かりと
 ずるを
 論

るに及ません古聖人も鬼神の敬て之を遠く智と云つ可
 と云れたさうですおマア其方が宜いと存ますが如何でせ
 う國如何おも御説は通り其の君御一人の御考而已ならず
 先世間一般に考て御坐ませう一體神の有無を決するに甚
 だ困難の事お如く見ますと總の事物おは必ず一定に法
 が有まして凡事物の何に依らず有るや有と成無あら無と
 成ねとありません又吃度其通に成まする決て事物お有と
 云ふ如く有る者無と云ふ如く無ある者杯と云事の有ません其は
 未充分に推究を遂ません証據と申へます。嘗て今より殆
 と四百年前に彼コロンバスのアメリカ國を發見する時の
 如者でヨウロッパお於て當時コロンバスの説を聞て觀と成
 程此より西方に尙國が有乎あると思さ。又他れ學者や智者は

説を聞て觀と何も如其る道理の到底如無小思をました。恰
好此所が如有にも思れ如無にも思るゝ所で御坐ます。併
先有者と信て船の乗り出帆して漸々進行すると數十日に
及しるもと毫も陸の如き物見ざるを以て遂に水夫等と到
底も國の有まじと疑念を生じ。途中より船を本國へ向て歸
さんと致せし處に。此時コロンパス一人あて必ず國が有な
らんと堅く信て動ず他者の百二十人も有し。皆國の無と
思定ました。若此時皆の意に任て船を還ましたら。歐洲諸國
お於て。愈學者や智者の説が一時は勝利を得たる。如く思
れて。下賤なる船乗の。コロンパスが説を全く妄誕に。敗北
を取たる。如く見え。ましたら。う。此での未全く孰が勝とも
敗とも確定する。義に。の。參。や。せん。何故を。穿。鑿。に。出。て。未。其。事。

を遂すして途中より歸し故に實の有無孰にも決する能ず。
若其通で有た。あら。恐く。の有無の論は長く歐洲に。殘。た。か。も
知ません。が。御。詳。知。は。如。く。幸。に。し。て。コ。ロ。ン。パ。ス。の。其。船。を。進
て。遂。み。ア。メ。リ。カ。國。を。發。見。致。ま。し。た。是。實。に。一。千。四。百。九。十。二
年十月十二日。で。御。坐。ま。し。た。が。此。時。に。於。て。の。コ。ロ。ン。パ。ス。を
愚弄する者も。あ。く。疑。ふ。者。も。あ。く。神。と。思。ふ。程。で。又。國。が。有。手
無手と。云。疑。も。全。く。晴。て。有。と。決。し。ま。し。た。若。又。無。物。あ。ら。假。令
世界中。を。乘。廻。し。て。見。て。も。決。て。國。の。有。ま。せ。ん。で。せ。う。然。ら。其
處で。彌。有。と。云。思。の。消。て。全。く。無。物。と。極。り。ま。せ。う。如。斯。充。分。に
探。索。を。遂。と。遂。ぬ。と。に。因。て。有。物。も。如。無。思。の。れ。無。物。も。有。が。如
く。思。れ。ま。す。斯。様。に。有。形。あ。る。物。質。否。西。半。球。の。如。き。大。陸。あ。於
て。す。ら。尙。且。然。り。况。や。無。形。の。靈。上。あ。於。て。を。や。故。に。神。の。有。無。

を極ることも其と同く私の思考に往昔聖賢の説し所或の
如の有或の如無有無未だ判然せざるは是全く未だ探索を盡
さざる故にして誠に能彼コロンパスの米國を發見せぬ前
の事に能く似てあります只この區別と云ふは有形の物
質を探索するの無形の靈上を探索するとの區別があれ
ば従つて又幾分か探索するの方法が異なります即ちコロ
ンパスが國を探索するの有形の物質なると當時コロン
パス一人の臆測にて有る有る無きに成ぬと云ふ所より起
りし事にて彼の東方の印度を延て西方を廻り居り世界の
圓き者ある可との推測にて其確証と爲べき者の絶て有ま
せんでした然と私の申上る神の有無を探索するの無形の
靈上との雖もコロンパスと比ぶれば最も確乎ある手

懸りが有て其上に古人が幾分の瀕蹈をし半途迄ありども
道が付て有ますから餘程便利で御坐ます而して又この造
化せられたる萬有の神の足迹の如き者おて或人が亞弗利
加之土人お向て汝の如何にして神有るを知らんと尋しに土人の
其人に向て汝の如何にして昨夜汝の天幕の前を駱駝が通り
し事を朝起て知かど尋しと不僮御考あさいよし通行する
駱駝の夜中寝て居る間ゆゑ見されども朝起て天幕の前に
其足跡有るを見て駱駝の通行せし事を知る如く我等の神を
見ざるも神の足跡ある萬有に依て神有るを知らず我國に
於ても神有と云ふ事の大槪承知して居ますが實に其神の
神たる由縁を誤り猥に多神ありと妄信して居ります故に
信神の爲と神を知ぬ人と申ても更お過言で有ますまい

に我國に於て太古より有神とし神ハ天地萬物を造化せりと爲も惜哉其神の神たる所
 以を認り狼に人事の私情より滋潤なる臆測を以て種々説をなす或ハ形體の見るべき
 者とし或ハ其數多しと爲し或ハ各自其主宰する所殊なる有とし近世本居宣長平田篤胤
 等の大家起りて大に神道の面目を一變し説稍や正當ふ復したるが如しと雖も未だ
 全ク其理を究めたりと爲す彼の平田篤胤が著せる鬼神新論の如き實に和漢の古典ふ
 因り詳細に論じたりと雖も亦誤謬なしと云ひ雖し 彼の和學ハ各高き平
 田篤胤先生は鬼神新論でふ書を著して神の存在を論ぜら
 其初に抑赤縣の古に上帝后帝皇天また唯お天とも云
 と皆同事にて前にも云る如く實物を指て云るめて託言に
 非ず。吾友鈴木朝いとく毛詩大雅に文王陟降在帝左右焉お
 予形無して左右と云事わらひやと云り此實に然る言わて
 形狀あしと定めたらひあ何での帝の左右と云「ひ」と論じ
 其註に「然るを朱子あ」と云ひく。今若説下文「王眞箇在上帝之左
 右眞箇有上帝如世間所望之像固不可然聖人如此説便是有

此理と云へり。天神の御形容ハ何に坐すかハ知られぬと既
 に御言と御行の炳然ければ。御形の坐す事ハ申し奉るも更
 あり何て是を不可ありと云ひ。又朱子の説に今人但以主
 宰説帝謂無形象恐也不得。若如世間所謂玉皇大帝恐亦不可
 とも云へり斯様ハ御形を有無に究めず論ふあを又例の
 心きたなき説ありあしと斯の如く平田翁ハ朱子の説を駁
 して神の形の必ず有と論ぜられました。私ハ素より朱子
 あも平田翁にも賛成の致ません。然ハ何故に其御形ハ我
 等に見えぬかと平田翁に詰問ハ此神等の御身を隠し給り
 と古傳ハ在ハ故に御形を見奉る事ハ能ぬと答ませうあを
 と私の考に神ハ靈ある故でせう畢竟帝之左右と云も文王
 の靈魂ハ歸往して今ハ天上ハ最高位に居と云意を表する

爲に形容したる語にて神の御側と云も同義でせう如斯例
 の夥有ます其一二を申さば鶴鳴九皋聲聞天又の天歩艱難
 あどの如く是皆上帝の存在を我等に覺易く云所の假の言
 辭です和先程より段々御説を承まひりましたが何も靈に
 して無形と申せば私共には甚だ難悟事で考へれを考へる程
 解なく成ますが彼コロンバスの事を思は何でも一番探索
 して試ませう神を尋ね求める事の國を探る様あ危難の無事
 にて萬一探し當らぬ所が此體も生命にも氣遣あく金銀上
 の損益も有ません故何所迄も探索し有無を極度存ます。
 「思想の船に帆を揚て推究力を楫とるし漕出したる靈上
 海眞理の方針違はず如何あ不信の暴風や邪説の雲霧起
 るとも事物の道理や理論の正錨と成て動すべ雲霧も晴

て風も静き難解不可思議の暗礁すら何の苦もあく乗越
 て。終にの着す上帝國の安樂城」
 此間或人は話に世に神が在に造物主が有のと云の畢竟
 無智昧味の時代に起し考にて學術が開け文化普く世に行
 へるよ今日あ於ての既取あ足ぬ説と成り宗教の段々退い
 て學術は世と成ます其解と昔の人の實に無學あ者でした
 故に事物は道理を知らず何を見ても奇異の念が起り恐怖心
 に發し即ち仰て天を觀心赫々たる日月や輝々として光明
 を發する星辰あり俯て地を察れ又萬物の繁く且つ驚く
 可き有て是等の物を造し者があるらんと思ひ而て之を作
 し者の人に非ずして必ず何の人間より勝たる者あらんと
 想像し是を名けて神と云ままた然に今道理に依て漸々推

究める時の總の物も明に辨り少も不思議と云物が無あり
 萬物を造化せし者の神も非ずして只一の理の有て存する
 を得たのじやと云事解て參るうでそが如何でせう
 「サア和市君確乎爲さいまし私のコロンバス君の乗客で乗
 出た船もあれは何所迄も有無を極る迄の道て試ませう成程
 ろと之實お面白説で御坐ます定て其に之確ある証據の有
 ませう如何にも御説の通り古人之事物は理に暗く無智昧
 味の者で有ままた而て靈氣を拜だ者でしたが君は如何思
 召ます乎今日學術上道理を以て推究めまされば果て神と
 無者と成ませう乎此萬物を造化せしは神に非ずして斯の
 如く成るべき一の理に因て生じた物と御考へあるひます乎
 私に思まするお道理を推て測ばるに却て猶神ある者が無

れば成ぬと思ます譬に今茲お机の有ますが是を見るお必
 す之を作た人が有を知り而て是を作た者は必ず木工ある
 事を知り其所以此物之何の爲に被作たかと考ふれば或は
 書物を載せ或之手習をする爲とか何とか必ず其物を造に
 は皆夫々其目的と云者が有ます然る此に造作人あくして
 自然に成りと云或は造作人が有ても何の爲に作しか目的
 無と云は其は誠に道理お適ぬ事では有ません乎凡て私共
 は何物に限ず何れ物を見て其お順序と方法を具備る有と
 さは必ず造作人が有て其を作り必ず何れ目的の有て作た
 る物にて決して偶然の事に非るを知らず斯の如く僅少ある
 物も於てすら然とす知て此天地の廣大ある萬物の夥多な
 る其順序方法の定まれるお於てをや如何お造作者無して

自然成り云れませう乎。何して目的なく偶然生じた
 りと云きませう乎。必ず此天地萬物に造作者が有而て其造
 作者は萬物より勝て大能力を備たる神なる事疑は有ま
 せん。和成程私共は此机を作たる職人と見ません。是迄の
 經驗に依て木工が作し事を知ます。此天地を作し神は何
 も經驗に依て知事も能ず而て影も形もあき神なる者が良
 や有と爲た所が何して此天地萬物を造事が能ませう乎。是
 は則ち彼の陰陽五行の化成する所の物おて一の理に因て
 自然に生じた物でせう何も神が造しと云証據が有ません。
 國如何も影も形もあき神が此天地萬物を造事能ぬ如
 お思召ませう。先少し考て御覽あさい。凡世上の百工が何
 お依す何か物を造うと爲時は先第一に心中に其作うと爲

物を作す。譬へ此家之最初何處に被建た乎と探るに必ず
 先此家を建たる棟梁の心の中に建らる而て後に此形に觀
 ぎたまた。君之影も形もあき神ある者が此天地萬物を造事
 之難き如お御謂あされました。此家の極原を探れを矢張
 影も形もなき心。此家を造ました。若形物を造ると御謂
 る。あら人形が何あ小な物でも宜が何の物を造事が能ませ
 う乎。其之確に能ますまい。又君は陰陽五行の理に因て此天
 地萬物が化成したらうと御云あされました。其陰陽五行
 の理と之と一体何で御坐ます乎。其ころ誠に空な生命も思慮
 も分別も智慧もあき物では有ません乎。而て其様あ説之今
 に始ぬ説で其を以て昔から諸先生が可杏せらるた者です
 お私之其を殺度御坐ません猶ろつと其儘生して置て御話

を致せしむるに此一の理ある者の到底も人智の得て知り
 難く謂難き者おして既お老子も有物混成先天地生寂兮寥
 兮獨立不改周行而不殆可三以爲天下母吾不知其名字之曰道
 むと云ひ其註に混然と云て得て知べあらず而て萬物之
 に因て以て成故に混成と云也其誰の子あるを知らず故に天
 地お先て生ず寂冥として形體なき也物の匹あし故に獨立
 と云也終始お變化して其常を失はず故お改めずと云也周
 行して至ざる所あく而て殆を死能大形を生全す故お以
 て天下の母と爲べき也名は以て形を定む混成形あし得て
 定べあらず故お其名を知らずと云也夫名以て形を定む字
 以て言ふ可を稱す道之物として由ざる無に取あり是混
 成の中言ふ可の稱最も大也と有まして終に自然を指て一

切の大原因と致せしたる如斯に不思議の原因ある事
 明おて其が常お存在するが故お又谷神不死是謂三玄牝一玄牝
 之門是謂三天地根一綿々若存用之不動とも云て有ます又孔子
 も鬼神の爲レ徳其盛矣乎○視之而弗見聽之而弗聞體物而不可
 遺○使三天下之人○齊明盛服以承三祭祀○洋洋々乎如在三其上○如在三其左
 右○詩曰神之格思不可度思矧可射思夫微之顯○誠之不可揜如
 此夫○と云れまして此肉眼を以て見耳を以て其聲を聞とは
 能ません此天地萬物を熟察するに悉く皆天の命令に従
 て成生繁茂して居り斯現在の結果を見て之を推究すれば
 必ず其原因ある事を知ます其より溯て其原因を探ね究
 る事之到底も人間の限ある能を以て測知とい能せせん故
 に古人と其知ざる事の知すとして天之不測謂神神而有常

謂^{てん}天^{とい}と 天^{てん}道^{どう}子^し全^{ぜん}書^{しよ}云^いて 御^ご坐^ざま^す 近^{きん}來^{らい}我^{わが}國^{こく}ふ^ミル^とク^スペ^ンサ^ル
 云^いと^か云^い學^{がく}者^{しや}レ^説ク^ガ行^{ぎやう}ハ^レテ^彼無^む神^{しん}論^{ろん}と^り進^{しん}化^{くわ}説^{せつ}と^り或^{ある}
 の^唯物^{ぶつ}論^{ろん}と^り云^い面^{めん}白^{はく}説^{せつ}ク^有マ^スク^是等^らも^只一^{いち}寸^{すん}聞^きテ^觀マ^ス
 す^れレ^を神^{かみ}の^無者^{もの}の^如く^思レ^マス^ク其^{その}の^皮相^{さへ}レ^事で^深く^其
 先^{せん}生^{せい}方^{はた}レ^説を^探テ^觀マ^スク^色を^矢張^{やはり}天^{てん}地^ちの^原因^{いん}ク^有ト^申マ^ス
 す^則ち^スペ^ンサ^ルの^云マ^シタ^語に^宇宙^{ちゆう}萬^{まん}物^{ぶつ}の^大本^{ほん}に^實物^{じつぶつ}
 と^力の^二あり^て借^かに^知得^よべ^らる^者也^此の^一切^{きつ}萬^{まん}物^{ぶつ}
 の^原で^萬物^{ぶつ}を^成長^{せい}せ^しめ^一般^{ぱん}の^物を^永續^{えいぞく}せ^しめ^總の^物の^關係^{けい}
 を^維持^{いぢ}シ^諸物^{ぶつ}を^變遷^{へんせん}せ^しめ^其平^{へい}均^{きん}を^保持^{いぢ}シ^て其^等の^諸物^{ぶつ}
 が^方向^{ほう}を^過ら^さる^事の^恰も^矢の^的に^向ク^如く^必ず^正
 論^{ろん}を^違ず^と云^いレ^又宇^う宙^{ちゆう}萬^{まん}物^{ぶつ}は^上に^一の^原因^{いん}有^ちて^是の^一切^{きつ}
 思想^{しきやう}の^大本^{ほん}たる^也と^も申^まシ^タ此^{この}ス^ペン^サル^の説^{せつ}お^就て

の^英國^{こく}學^{がく}士^しイ^ヒレ^氏の^明治^{めい}十^{じゅう}六^{ろく}年^{ねん}出^{しゅつ}版^{ぱん}せ^らレ^タる^第一^{だい}東^{とう}
 京^{きやう}演^{えん}説^{せつ}と^題せ^る書^{しよ}に^委く^論て^有マ^ス又^{また}ミ^ルク^語に^熟々^{じやくじやく}宇^う
 宙^{ちゆう}萬^{まん}物^{ぶつ}を^觀察^{くわんさつ}す^るに^必ず^是等^らを^生ぜ^し一^{いつ}大^{だい}原^{げん}因^{いん}無^むる^可ら^ず
 而^{しか}し^尙今^{いま}も^其存^{そん}在^{ざい}シ^テ萬^{まん}物^{ぶつ}を^統御^{とうご}シ^保へ^しと^有マ^ス
 又^{また}有^あり^名なる^博物^{ぶつ}學^{がく}者^{しや}ダ^ルウ^イン^の生^{せい}物^{ぶつ}原^{げん}始^し論^{ろん}お^造物^{ぶつ}主^{しゅ}始^し
 む^二三^{さん}或^{ある}の^一の^物質^{ぶつしつ}お^生を^與へ^其よ^り終^{つひ}に^凡百^{ひゃく}の^生物^{せいぶつ}を^生
 ず^るに^至さ^り斯^かの^如く^見と^きの^反て^造化^{ぞうか}は^美妙^{めうめう}を^増し^其
 其^{その}構^{こう}造^{ぞう}の^廣大^{くわい}なる^を見^みを^得べ^しと^云ひ^又我^{われ}心^{こころ}に^深き^感動^{かんとく}
 を^起せ^し景^{けい}色^{しき}の^内人^{にん}手^ての^未觸^ふさ^る森^{もり}林^{りん}よ^り勝^{まさ}レ^タる^のを^生
 し^是皆^{みな}造^{ぞう}化^{くわ}の^神の^聖殿^{せいだん}お^して^人其^{その}前^{まへ}に^立バ^人類^{にんるい}の^僅に^生
 を^有す^る而^{しか}し^己の^者お^非ざる^事を^知べ^しと^同氏^しが^著書^{しよ}お^て
 博^{はく}物^{ぶつ}學^{がく}者^{しや}世^せ界^{かい}一^{いつ}週^{しゅう}記^きと^題せ^る書^{しよ}に^云は^せ又^{また}高^{かう}名^{めい}なる^動物^{どうぶつ}

學者ルイスアガセ氏の自の動物試験場に掲示して若此所に來り造化深殿の美を探らんと欲せば宜く衣服禮義を正し敬神謙遜の心を以て來べし蓋此堂も亦禮拜堂と同く聖神の在す聖殿あきべ也彼處に在ては上帝に聖言を學び是處に居ては上帝の妙功を學べば也と録さるるなりです以上三氏の説に東京六合雜以上申せしたる諸名家の就も當時學術上にあつて高名ある大家先生で御坐ます然に兎角世間此の深き考をも爲す天地の原因の理じやと聞て既神で無と思ひ天じやと聞は又別者の如く考へ神じやと云は又異なる如く思ます其指所の者の同者で譬を當時諸方にあつて盛に製造し普く世に行はるる彼「マテス」に如く或人之之を原語に儘「マテス」と云或人は早附木と云或人は摺

附木と云又他は人は摺火とも云如く皆人々に依て名稱を異ふし即ち能云言あるの浪華の「マ」の伊勢の「ハ」オギで名目は其入其所に依て異なるれと實物に至ては同事です一休和尚の歌とて

名も迷ふ人の心の愚さよ

食て知らぬやれおとぎばたもち。

何と面白き歌では有ません乎是もて能く御考なさいおし名稱は何で有ましても其に構ひ有ません實物の存在するを証する而已です我國に於て是を天御中主神と申奉るも矢張天地萬物を御造あされたる神を指て申言にて是を世界の諸國に尋るも言葉は異れと其意は同事です最初パピロン國の人は神を指て「セルバチ」と申て譯すれば即ち無始

無終也と云義で御坐ます。是をエチプト國の先祖は「ラモン」と
 申し即ち若賢奧妙察不出來者の義で又「ベルシヤ國」で「コ
 フラマチャ」と申て其意義の即ち創造天地之活主宰と成ま
 す。又印度國では「テウシ」と申て其意は「光」或「天」とも爲
 ます。又ローマ國の先祖は「ソウパタル」と申て即ち天父と云
 義です。又蒙古に於て始祖は「ランリ」と申即ち天と云ふ意で
 す。又歐羅巴大洲北境の土人は「ウンマ」と稱へ天と云義で。其
 南境の土人は「コーバ」と申て主と云義で。是を又米國の土人
 は「マイン」と稱へ大神と申義に爲ます。而てエタヤ國
 での「エロヒム」と云ひ又「エホバ」と申すして「エロヒム」とい頂大
 之力氣と譯し「エホバ」とい自然而然者也と申義で即ち上帝
 天父あて古の聖賢方が常あ畏れ敬ひたる者で孔子の語あ

君子畏天。命小人不知天。命而不畏也。云また獲罪於天。無
 所禱也。また欺天手。また知我者其天乎。あどと申すして是を
 以て考ふを「聖人孔子」の必ず天に實物の神が在て世中の
 萬事を主宰り給ふ事を熟く悟りて畏べく欺くまじく天神
 の御心に背てい他に禱る神の無と畏れ敬ひれよした。然る
 を古今の別るく世に愚人が有まして。神の無者と思ひ徳を
 亂し種々の不善を行て遂あ天罰を蒙ります。神が無と思
 ふ心の不善を爲の本とあり善行を爲あ弱く成ます。聖詩に曰
 中。心以て神なしを爲て自ら敗壞を作し且神を知る方法は種々有
 たり。殆ど三千四百餘年前に於て「アラマ」の人「ツハル」と云
 者か或時「アラマ」云ふ義人に向て尋ました。爾は豈て能く神の
 深奥を窺測らんや。豈能盡く全能者を知んや。乃ち高と天の

如し爾何能為や其深と陰府よりも逾ぐ爾何能知ん乎と云
 しにヨブは答て今試に諸獸に問よ必ず獸が汝に神有を教
 べし天空の鳥に尋よ必ず鳥が汝に神有を教べし地に尋よ
 地の汝が神有を教べし海の魚又汝に神有を教べし此等の
 衆物を以て之れ皆エホバの手所為たるを誰の知ざらんや
 と云ましたる矢張今日の學者も是と同説で御坐ませう前
 に申上たる如く只其名稱の異同は有ますれを指所の實物
 を異の有ません而て其を知との淺深は有を原因あるを
 知ぬとは決して云れません其故に聖徒パウロは羅馬書に論
 て蓋人の知べき所の神の事情は人に顯明にして既に神を
 色を人に顯し給へば也。されば見とを得ざる神の永能と
 其神性との造れたる物により創世より以來さとり得て明

お見べし是故に人々推諉べき様ありしと申ました其所で斯
 の如く受造たる萬物に依て目お見へざる神を知とを得ま
 す。今より殆ど二千三百年頃前おギリシヤ國おソクラテス
 と云聖人有しが此人或時二三の弟子を從へて彼有名なる
 アテナスの市街を徘徊せしに或人形屋の前に至り其人形
 を見て弟子等頻に其精巧を極たるを賞讃して止ざりき
 然にソクラテス彼等お向て汝等何を賞讃して止ざるやと
 問ふに弟子の一人答て師よ此の人形如何か精巧を極め
 善を盡し美を盡せる手を觀給へ實お賞讃するお餘ありと
 云り斯てソクラテス弟子に云ける誠お然矣汝等此市
 中を徘徊する所の此衆多の生る人形を見よ身體髪膚みな
 生命を有ち仁義の心を備へ事物の道理を判別するの智識

を有たる此活る人形を視て何予其工者を讚賞せざる乎と
 申せしと予又神を知に最も近き者此人間の靈魂で此靈
 魂何なる者にして何處より來り何處へ往る又此體も居
 て何なる動作をする乎此靈魂の希ふ所好む所の何予と詳
 細に考ふる時明かに解ます然るを多く唯瓢を弄して
 少も考ふる事なく其日を送り神の靈なる者ヒやと聞ハ愕
 然して不思議うに思ますが實のところ無く我身體
 及び生命靈魂が誠を考て察レハ不思議千萬の物で御坐ま
 す誰人も考ませぬ故に靈魂の有か無か知ぬ様に見えま
 すが能く鑒て察まするに確に靈魂が有て此體を主宰する
 云とが明に解まする其靈魂の何ある者乎と探ぬれば
 如斯る者と云て人に示すこの誠に難事ですが其働と願欲

する所を以て推探ぬる時何なる者かと云とを能知
 とが能ます其故に其靈魂の目を見えませんが我の有と知
 ます而て此靈魂有が故に人の萬物の上お位して靈長と申
 ます決して人間に此體を以て靈長の位に居ると能ません
 何あれハ人間の體も獸類の體も皆同質の原素より成立て
 大概同物です其所で其等と區別を爲んがため神の特
 魂を賦與し給ました彼創世記の第一章に人を神に像に象
 りて造り給へりと有まする即ち此靈魂を指ものにて人
 間の形體の事有ません斯様に我等は靈魂の本體ある神
 の在あつて其原因と成り之を以て其原因ある神を知り大
 原ある神に歸する事を得ます箴言に人の靈魂のホバの
 燈と有まして若ふの燈即靈魂が有ませんから人間之如何

でせう獸類と少しも異事ある道徳の念もなく事物を探索推
 窮する思想も發らず往事を回顧する事もなく未來の事物
 を念ふ煩もあらず則ち昨日の事を以て今日の益とし昨日
 日の實驗を以て又明日の誠とし昨年の遭遇せし事物の今
 年お至て経験と熟練とを與へ今年の拙の尙工夫を施す事
 に依て明年の巧を來す等のとに更に有ますまい斯の如き
 情態の一般鳥獸蟲魚の情態にして人間は是と異なり則
 ち道徳の性を備へ義を好み善を欲し品物に就ても粗惡を
 嫌ひ美麗を好み貴を望で賤を望す平康を求て困難を願す
 幸福を願て不幸を欲せず而て今現在の有様よりも尙其上
 を望む益々進歩の念を有するの必ず縁由の有とで則ち古
 より今日お進歩したる所以で御坐ますが併し有形の物事

の御詳知の通り進歩致ましたれと哀哉道徳の點に於て
 尙退歩の姿に立至り誠に歎息の至に存ます是畢竟神を忘
 れ遠きかり彼の燈を掩ふて暗くするが故でせう凡人類の
 神あるを信じ其命令に従ひ其教を守るとに依て得所の利
 益と多して其を信仰するが爲に損害と受ると云とは少し
 有ません之に反して獨一の上帝を信仰せぬ人の如何ある
 人にもせよ其心に實の幸福と満足と喜悅と希望とが有ま
 せん又神有を信するは第一道理に適ひ第二古の聖賢は
 証を爲し第三萬物は是の明証を與へ第四當時の學術之の証
 を建て第五聖經之か説明を與へ第六人類の靈魂と道徳性
 是の確証をなす是を即ち神ある証據あして神も亦我存在
 を人類に顯さんと爲れ知せんと思召所の義で譬を現在我

が生の子を失ふるか或之悪人お奪れて後他人に手お成長
し眞實の親を知らず親に非ざる者を親と思ふて居を見む其
眞實の親と必ず我の汝の親で有と云とを知らせ度と思ませ
う其所で其を知するおの必ず其子に何か覺の有証據を以
て知らせよ而て又其子も能自分れ心に考て觀て成程らう
云ゐるよと此人は顔と私の顔と能似た所お有り何も他の
人と異て親切ある所も有ると種々思合せて確ある時
我親は是で有と知ませう恰好其通り神と人類との關係も
是と同事で御坐ます今聖書中歴史上に於て事實の掩ふ可
らざる確あ一例を擧れを則ち彼アブラハムの事蹟です世
間お論難する者有て聖書は妄誕にして信するに足すと云
ますれど此事は決して否むと能ませんアブラハムの今よ

り殆ど三千八百八十餘年前おアツスリヤ國のハラシと云
所お住居し齡七十五歳の時上帝エホバの召を蒙り妻のサ
ライと弟れ子ロトを伴ひ其他家僕や家畜及び貯積したる
品物財貨を挈て住馴し故郷を離れ知ぬ他國の空天遠くカ
ナン地を望んで旅立ち遂に其地お着し其より又諸所を
遍歴せし事や神お時々彼お教命を下し常に守り導き遂お
齡一百歳お及んで一子を與へ此子より又ヤコブなる者生
れ此ヤコブおイスラエルにて十二人の子供を生み是より
イスラエルの子孫お繁盛に成まするお此アブラハムの事
は獨り猶太人や基督教徒の之お尊敬する而已ならず廣く
アラビヤ人アフリカ人中お於て昔より今日お至まで篤く
尊敬し彼を稱して父アブラハムと申て居ます又基督教に

敵するマホメット宗を奉る人々でもアブラハムやモーセ
 を能知り誠み尊敬致して居ます其所で此アブラハムは獨一
 の上帝を信仰し此神を深く愛し奉仕り神も特に彼を恩み
 幸ひし護給ました斯様ある事實は決して動す可らざるとで
 耶穌教信者の信仰する神は即ち昔アブラハムが信仰せし
 神にして其信仰は摸範に従ひ習ふ者で其故にアブラハム
 の神イサクの神ヤコブの神と申す斯の如く神の存在し
 給ふ証據の何の点より觀まするも炳然として明です
 無と云ふ証據の何の因て何處も有ませう乎其故に神の存
 在を信するの難よりも寧神無と云事を信するの最も難
 事にて一として明ある証據の有ませせん
 昔約尼希米記第九章に
 曰く神は獨り耶和
 華たり爾天れよび諸天の天と天の衆軍とを創造し又地によび其中の萬物諸海及び其
 中の萬物を造り且つ悉く爾の生存する所たり天の衆軍爾を崇拜せり爾即ち耶和華

即ち昔アブラハムなる者を選めるの神なり之を携へてカルデア人のウルより出其名
 を賜ふてアブラハムと云へり爾其心爾の前に思ふるを見て則ち之と約を立て許すに
 カナアン人へテ人アモリ人ベリシデ人エブス人ギルガシ人の地を其裔に賜ふを以て
 し今己に爾の言を踐めり蓋し爾の美たれはあり我の列祖エジプトに在て苦に遭ひ
 パロ之を鑿み彼紅海に在て呼喚せしかば爾之を聽けり爾且つ奇跡異兆を顯はして以
 てパロと其僕衆及び其地に在の諸民とを賣たり蓋し爾の驕傲を知て我列祖を攻め
 爾則ち爾の名を揚るまど今日の如なり爾又海を其前分て其陸地を行て海中に通行
 するを致し之を追ふ者ハ爾之を淵に投ずると石を大水に投ずるが如く然り蓋し爾
 爾雪の柱を以て之を導き夜ハ爾ち火の柱を以て其まさふ行べきの路を光照するを致
 せり爾又シナイ山に降て天より之と言ひ賜ふに正例眞法善律善命を以てせり爾の聖
 なる安息日を以て之ふ示し又命を以て爾の僕モ―セの手記して而て之を命せり其
 儀たるが爲ふ則ち天より之ふ賜ふに餅を以てし其渴するが爲に則ち露より水を出し
 且つ其必ず入て爾の誓ふて彼に 何と和市君尙御異論が御坐ますの
 賜ふ所の地を獲を許せり云々
 如何です和否モウ充分の御説明で全く神の存在し給ふ事
 の明かお解おして少も疑ひ有ません成程世に神が無と思
 ふのハ全く淺薄ある考より起ました事で只今の如く詳細
 お承りれを何爲ても神の存在し給ふと明瞭で御坐ます
 の其神の御性質及び其御有様の如何ある者です其等の事

を委く親ひ度存ます。是の御尤もの御言にて私に於ましても最も御話し申上ねを成ぬ所で御坐ります。併し御承知の通り是の餘程難測知とあて古の聖人賢者等も其説明に甚だ苦まを或は了知し難き事と見えて既に孔子の高弟ある子貢が語にも夫子の文章の得て聞べし夫子の性と天道とを云ふの得て聞べからず杯と有まして勿論この性と云ひ天道と申す言の神性を指もので有ません。則ち人れ性情と天道で御坐ます。是の又實の神性より別るる所の枝葉で御坐まして其神性を講究するの後み至れを自然と解て参ます。然と其根元ある神性の如何を知得ざる前あ於て又猥ふ語ざる可と致ます。何故あれを人に語りましても聞者に其を了解する程の見識が有ません。而て其が解

ぬ時は實理の事でも其人に取ては怪談の如く思之れます。其故に又孔子不語怪力亂神と有まして彼の朱子も是神の字へ註して鬼神造化之迹。雖非不正。然非窮理之至。有未易明者。故亦不輕以語人。也と申て置ました。是は因て觀ましても神性を論ずるの難事の明らかで御坐ます。故に世人も到底神の性質の聖賢の傳へるきを以て難知者と断念る者あり。或の強て種々の妄想を生じました。解でせう。然るを今私の如き者の御話し申さんと爲るは最も難事。あて或と妄誕ありと思召るも知ません。お決して然思召て下さいませ。私の申上んと爲る所乃ち聖經の教ゆる所に於て更に人類の想像に出る者で有ません。偕て神の御性質品位の如何を約言致ます。心を則ち獨有。一眞永。生神。無形質。無情欲。至能

至智全仁創造及生三存一切有形無形萬物此獨一無二之神是
 三位一體聖父聖子聖靈是也其本體權能永生都是二樣と申
 ますが只如斯ふ申上ての御解お成す却て御疑が起ませう
 故に神は唯一の有りと云ふ斯く天地日月星辰萬物の廣般
 繁雜あるも必ず一定の法則ありて悉く皆合宜一致し毫厘
 も相違ふとなく恰も符節を合するが如し例へて大にして
 と日月星辰の運行する其行道を誤らず確然として一定の
 法有て天文推測の術之を證して明瞭で御坐ます故に是
 等を初に造り其法則を定めし者の必ずと申すとが知ま
 する若し此が多くの神有て各自其思慮する所に從て造り
 其意に依て法則を定ましたら必ず混亂して互に衝突て盡

滅するに至ませう又少にしては是萬物にて此中上之吾輩
 人類を初とし下の鳥獸草木虫魚の類に至まで悉く一定の
 法則の中に造られ生存し死亡して萬古變らず萬國同一で
 御坐ます例を我國の人と支那印度英佛獨土亞北極米と九
 箇國が十箇國の人を一室に併列し之を一日すまは各自其
 言語異あり風俗容貌の異なる所無とい申されせんが是
 等の其土地風土の違ひに依て斯の如く成ますを其體軀
 の構造機關の組織性情の如何及び倫理道德等に至ては皆
 均一の者で御坐ます古昔未だ開化せず萬國通航も無し
 時代に於ては種々の妄想を爲し或所には長耳國と云が有
 て其國の人間の耳が長く四五尺も下に垂て居ると云ひ或は
 長手國が有て手が五六尺も長い人間が居の長脛國が有て

其の長きと云ひ其他様々の異人々異國に有と云ふ事
が或書物に記て有まして私に幼稚に常お其書を讀で
娛で居ました實に昔は種々ある説が多有ました彼の
支那國は文學頗に開け記録物も古くより傳り從て多の奇
聞異説も有まして中にも珍しき話の蛇身人首と云て體
の蛇で頭が人間ある帝王が有り又人身牛首とて體軀の
間で頭が牛で有たる帝王が有ました實に支那國で龍
蛇を最も貴重致して龍の神變不測能を有て居り能く
雲を起して之に乗り意に任せて天上を飛行す杯と龍を讚
め貴びます故に其偶して天子の體を龍體と云ひ天子に
拜謁するを龍顔を拜すと申す故に帝王の威徳を稱せん
のため蛇身と記したる者です又人身牛首と云ふ天子の始

め草木の皮や葉や根をを噛味ひて醫藥を定めました故
に牛に如く申ました解です決して實に牛で有ますまい獨り
支那而已ならず我國を始め古き國の兎角稀有有る説が傳
て有ます又尤も世中に何か爲と指の六本ある人や三足の鳥
有ます又或の双頭八足或の双頭二足一頭四足あはれ者
や獸が出來たり其他種々ある異形の怪物が有ますは是等
の出來たり其他種々ある異形の怪物が有ますは是等の異
の千萬中の一お過ません故に其を以て例證と爲との決て
能ませんア熟觀察て御覽なさい日本人の眼の有る所
矢張外國人も有ます其通り耳鼻口皆同事で女の凡て男
に従ひ男の女を愛し之を宰む男の勇剛に女の溫柔日本の
猫が鼠を獲れた外國の猫も亦同く鼠を獲り外國の牛馬と

やとて鼠を捕りて猫の役目を爲事もあく馬の馬牛の牛其
 他百餘の事物皆これ同一で御坐ります是を以て推考ふる
 おこれれを造り宰る所は神の一なり若又諸國各異なる神あ
 つて各自其欲する所お從て是等の諸物を創造し主宰る事
 を致ましたなら必ず一致符合する事能ますまい譬ば私
 と君と今茲で御互に筆と紙とを執て何か文字あり文章な
 り隠して書て一所お並べ置て試に誰か他の人を伴ひ來り
 之を一覽せしめて是等の書の一人の意匠に出で一人の手
 お成しや否やを判断せしめば其人如何思ませう如何に其
 人愚鈍ある者と雖も如何に物を判別する力に乏き者と
 雖も少しく文字を知たる人あら決て之を見て是の同人
 お同思想を以て之を書たとい思まそまい必ず之の別人が

各自別の思想を以て書たる物じやと判断致ませう。何ある
 ば先書たる其書風が違ひ又其文意が異なる故です。然お私
 此通に二三枚書て之を諸方に散し置他人之を拾ひ集め而
 て之を判断せば此人何と思ませう乎。嗚呼我これを各異る
 場所おて拾ひ集し。是皆同物なるべし何あれば此書風同
 く文意同じ。故に必ず是の一人に意に出。一人の手に成たる
 物に相違あしと確定致ませう。恰も其如く世界萬國古今の
 別あく萬物皆一様で有まするが故に。是等を創造し守りた
 まふ神の一で此神の唯にユダヤ人而已の神に非ず日本人
 而已の神にも非ず實に之れ萬國萬民の神で御坐ます。斯様
 お私お申おとて決して昔彼僧徒が唱道したる本地垂迹の
 説の如く神佛混淆は義と違まして。古代朦朧として明らか

ちらず區々として一定せざりし天下諸國の傳説を合し理
 論れ正さお訴へ事物れ確証お因て御話申ことにて更お率
 強附會妄誕れ説で御坐せせん我の外汝に別の神ある可ら
 ずどの聖誠の第一條に記て有まして基督信徒たる者の第
 一に詳知せねを成ぬ大切ある事で彼世間にて多神を信す
 る原因の一にして足す種々其所以が有ますれを畢竟する
 お己が信仰する所の神を不充分ある者と思ひ其神を信仰
 し之お依頼するの念薄が故に漸次に多神を信仰し其不足
 を補ふて以て我心の満足を得んと欲るに止ます然をにや
 天下何の國にもせよ必ず是大ある神を知らざる國に於ての
 二三種或の夥の神を祭ますが假令八百萬千萬の諸神を祭
 拜と雖も眞お人間の祭へき大神を捨置て祭る可らざる物

類を神と崇て祭る故心に眞誠の満足を得らるやせん是を
 譬を彼少ある女子が人形を以て遊ぶがらサア妾が今衣服
 を着て上るよ確としてお在でよアレ動てい成ませんよア
 、お哭で無よモウ直に濟ますよ今お好物を上るから早と
 お獸よ杯と恰も大人が小兒に向て物云ふ如く人形に對て
 獨言を云て居と之を其邊に見聞して居小供が又共に相手
 に成て相應に調子を合せて遊で居ますが其子供お向て汝
 達の眞に其人形を赤子と思や否やと尋ますれを無論然で
 無と答へませう實に彼女子の心に自然と小兒を愛育する
 性質を備ふるが故に人形を以て自ら其を小兒と爲て遊戯
 ると如く人間の心お自然に神を拜祭の性質を有て生き
 て參ますが故必ず何か神を拜祭ねを自ら心に安康を得ま

せん故に彼此と神ある者を考探て終に多の神を祭に至す
 是が實に祭へき神あつて其事を瞑々の中お知まひる義
 で即ち聖書に夫宇宙と其中の萬物を造り給る神の天地に
 主あられ手あて造る殿に住給す且衆人お生命と氣息と
 萬物を手給へ物に乏き事あし人の手にて事らるゝ者に非
 ず又一の血脈より出し凡の民を悉く地の全面お任せ預じ
 め其時と住所の界とを定め給へり此の人をして神を求め
 しめ彼等が或の揣摩うる事あらん爲ありと有まして天下
 諸國に古代より種々れ傳説あり種々の神を祭るの此故で
 す和成程從前の人間の智識も狭く從て其思慮する所も至
 て小く其小く狭き考を以て此廣大無邊ある天地萬物を創
 造し給る神の事を推量る事故種々れ考を起し遂おの知す

九 第
 神は無
 始無終
 なるを
 始す

識す其神を人間の如く思ふ様に成ましたものでせうが如
 何おも只今の御説にて天地萬物を主宰し給ふの唯一の眞
 神で有ことい能く了解ました併凡る物に必ず本末あり
 事に必ず終始あると決て免れぬ理で此神とても必ず
 本あり始ある理でせう如何で御坐ます國「左様です是の最
 も知難事で全体此有形無形一切の事物の太初の時に於て
 其大原を神に發し此天地萬物の生成致まして初て時ある
 者起り事物始て其本末始終も起し者で未空漠として事物
 有ざる以前に於ての時も無く從て始終本末も有ません故
 に神の無始無終と申まして即ち前に申上たる如く永生で
 御坐ます先はお就て我國の古傳説おも天地未有す從て萬
 物未成す八百萬千萬の諸神も有ざる前に於て既に存在し

繪し神を稱して天御中主神と申すは是即ち私の申上る
 所れ神で彼平田翁の説み御中主大神の五百編千編を引延
 て編成せる如く宇宙の萬物を悉く主宰り給ふ事と聞えた
 り然る此大神はしも無始より坐ませば最第一の神お坐ふ
 と申も更めて其御功德の廣く大あると稱へ申べき詞も無
 と知べし阿那かして阿那多布登と古史傳お見ます又前に
 申上たる天下諸國の傳説にも只太初お神在て萬物を造給
 りとの傳ますれど其神の始の如何に有しる更に傳説が有
 ません故知詮なし若又神に始が有しる其の神で無き証
 據で總て受造たる一切の物の神に非ずして即ち皆みそ物
 類です物類と神との天地の懸隔ありて決して相混る事能
 ません其故の神の物類を生ぜし者物類の神に因て生ぜら

れたる者故に物類に始あり神に始ありしで御坐ます彼
 有名なるモーセが祈禱の詞に主歟歴古以來の世々爾曾爲
 我儕之居所兮山未見生爾未産天地之先自永遠至於永遠爾
 爲神兮と有ます是永遠と云意義に就て或時佛國パリス府
 には靈學學校に於て質問せし所其生徒の一人が永遠との神
 の生涯を云也と申ましたが何と美事なる答での有ません
 乎斯の通り神の無限の時より存在して又無限に至り永遠
 不窮で御坐ます和へ一如何にも御説の通り能事物を考
 て察ますれば神に始め終り本末の有う道理の有ません理
 由です是迄の實お神の神たる所以を誤認て居ました而て
 此全世界宇宙間に我等人類たる者の拜し祭べき神の一よ
 り他に無ことと又人間の靈魂より考て觀ば明お神の無

第十

神の無
形質な
るが故
に無情
欲なる
を論ず

形にして靈ある事も解ましたが茲に御尋申度の御詳知の
如く人間に喜怒哀樂の七情あり又其に從て情欲と云者
も有ますが是等を賦與し給ふ神あるを矢張其情有給ふ
事と存ますが如何でせう國左様で御坐ます是又最も心
得置べき所で輕々に見過て成ませぬ案に古代種々の邪
説が起り其祭典の式例杯に惡弊風の起し理由も大に此所
より誤りし事で有ませうと存ます先此喜怒哀樂あせの七
情たるや最も尊き者あして誠に人類あ賜へる大なる恩と
申べき不す其所で別て七情との申ますを畢竟するに善
惡の二途あ因て其を取捨すべきです例に只に怒と云ひ惡
と云とさの甚だ宜く無様あ聞ますの惡事と怒と云惡事を
惡と云時の誠あ結構なる者です神に必ず此性を備へ給

ます其通り善事を見ての之を喜び之を愛し樂み給ふ事疑
の有ません故あ人間も此情を以て其用べき正き方へ用ま
すまば實に幸福ある者で義を見て喜び不義を見て怒り惡
事を見て哀み善を聞て樂み神を愛し父母妻子兄弟朋友を
愛する等の如の皆大切なる情宜です然に兎角其用べき所
を誤て多の用べからざる方へ用る故に却て惡と成まして
茲に於て情欲の私と名目が變り從て惡と云位が定ます誠
に危い事で之を譬て申さを恰と刃物の如き者で政府の法
律として總て刃物を以て人を切者の必ず法に依て處分す
べしと有ましたとて醫者あ病人を治療する爲に其人れ手
を切斷し足を切ても法の罪人との成ません通り其用法の
如何に依ての善惡甚だしき差別と爲ます既に古の聖賢も

是を説れて喜怒哀樂の未だ發さる之中と云發て節に中
 る之を和と云中の天下の大本和の天下の達道中和を致して
 天地位し萬物育すと有まして誠に尊き事で即ち天の御徳
 を稱たる者です斯の如く既に神の性情を備給ふ故に我
 等にも御與に成ましたが此尊き性情を穢すの我等の肉
 体には在る所は私心私欲で神の形体は純全たる靈而已で有
 る故に私共の如き情欲の更に有ません此事は就て私に實
 地經驗致たる事有りました其の時或時私に最も重き病を煩
 ひ既ち死に瀕せし時當て此体に屬する願欲の全く失
 て靈魂に屬する希望而已ち成ましたが此時始て情欲は私
 ある者の全く此肉體に屬する者たるを悟り彼鳥の將に死
 んとする時其鳴聲や哀し人れ將ち死んとする時其云言や

善と云語の眞實あるを知らした。凡て肉の願ひ靈に逆ひ
 ば願ひ肉に逆ふ者にて世中に金言と成り名訓と成べき語
 の大概肉情を離れたる潔き靈性より發する者です然れ
 を知すてし他神を祭る人々己の穢たる情欲より考を起
 して財寶の神とか愛敬は神との軍陣の神杯と種々の神を
 作爲して其禱文も多き情欲の私言を用ひ供物なども皆
 私欲は好所の物を捧げ俗言に云如く御酒あがらぬ神の無
 で誠に甚だしき惡風が有ます神の肉體あさ故に情欲あ
 く情欲あさ故に斯の如き祭典の神の御心に合す聖書に
 記して神の靈あれを拜む者も靈と眞を以て拜むべしと有
 す是を以て神の無形質無情欲にして聖潔と申ますが君
 之を如何思召ます乎熟御考あさいまし和禮誠に御尤は御

話と存す段々神の神たる御性質を承せられ念々従來の迷誤を現れ何とも辱入たる次第では是迄神事祭禮と云を様々々々悪弊が民間に行われしも全く人間に如く神も情欲有て人間の欲念より發する喜樂の矢張神も喜び樂み給ふ事と誤認せし故でせう去るがら神の人間の如き情欲の無私として見を斯の如き祭典の神の心に合ぬ事勿論のとにて少し識見を有する人が見ても實に厭惡すべき弊習で御坐ます借て既に神の情欲の私あく至聖ある者に在せを又極て至義ある御方と存ますが其聖且義ある所より格段に何か著しき驗を以て人間に自の御有様を御顯し成れたる事の有ません手私の考ますに義き神あるを必ず顯然と其有様を現して一時に天下諸國の人民に我存在を示し

第十 第
 天下萬國古今の興廢存亡に就て神自の存在を示し以て其公義を顯し給ふを論ず

給らうあ者です而て其上未其神に従はず神である者を神として祭り種々悪を行ひ其時ふる嚴罰を下て他者の懲罰の爲御罰し爲れたら宜らふと思ます然すると私始め直に其神を拜み祭ます然と冥々の中お知せるとい些解ません此義の如何でせう乎國如何にも君の御尋一通り至極御尤めて随分世間お君と御同論の者が有ますが先私其の思慮する所と神の思慮し給ふ所の決て同一の者で有ません一寸申さを彼燕雀何ぞ大鷗の心を知んと云如く等き同類に於ても既雀の如き小鳥に大鷗の如き大鳥は心の圖り知れぬと申事ですが況や神と人との懸隔大あるに於をや即ち聖書に録て耶和華曰我之思念非爾之思念我之道路非爾之道路蓋如三天高於地一如斯我之道路高於爾之道路我

のしを念、高ニ於爾之思念一矣。と有る如く人間の思と神の思召との
 天地の違です何あれを類を異に爲さば從て思慮も異りま
 す譬ハ人間心の心を鳥獸に能知とが能ぬ如く人間の如何
 智有と雖も神の聖意を全く測知との能ません然ども神の
 人間に自の聖意を敷々特別に御諭成せました其方法の様
 々あれを概ね二様で則ち一ハ預言二ハ奇跡にて是等の大
 く舊約の時代に神が行ひ給し事で先第一に神がアダムと
 エバに御話を爲され其後カインやノア、アブラハム、モーセ
 と其他多の預言者杯々皆御告が有ましたる大概の御自
 非ずして天候を以て御告なされた何あるを若神が御
 自御告成れたら其言葉の最も恐しく有まして聞か難
 事せう聖人孔子も迅雷あり風烈き時の必ず顔色を變じ

恐を怖られたと申事です。是の則ち天神の聖旨如何と懼
 たる故です雷鳴を聞てさへ斯の如く有ますもの況て神の
 御言葉を聞きましたら其時即坐お死するかも知ません昔イ
 スラエル民が埃及を出て沙漠に居し時ホレブ山お於て
 神が十誠を御與へある時御語りあるされた事有ました
 其時人民の遙山の麓に居て其を聞に山上の黒雲にて掩
 ぬれ天地振動して其聲雷の如く誠に恐しき事有ました
 故其後モーセに願て何卒以後の如斯事あしお矢張モーセ
 依て御告下さる様に致ました實に之の然も有べき事に
 て最も恐多く可謹事で苟も御言葉を耳に聞度あせと思て
 の成ません之の不敬の甚だしき言で御坐ます若目で見ぬ
 故信せられぬ耳に聞ぬ故信せられぬと爲さるの獨り神の

御事而已であく随分世に信ぜらるぬ事が多有ます譬に
 國に帝王が在と申ても私に帝王を見ぬ故に信ぜぬと爲ね
 ば成ませんが之の些不敬おして又愚る話で有ません手
 凡信すると申事の未目に見ざる所の者を有と信じ認る事
 で見たる以上の信するといふ云れません其の知と云事も成
 ます併し其知と云のも目で見て知の甚だ僅な事で見ず
 して信する方が多く有ます假令に歴史を讀で既往の治亂
 興廢沿革及聖王賢臣名將豪傑あどの事を知も皆其を私に
 見て知るのでなく又地理書を讀で諸國の風土人情より名勝
 舊跡物産其他百般の事物を知も目で實地目撃して知ので
 有ません多くの信するのです故に是と同く我目其神を見
 奉つらずと雖も其御言葉に依りて明に神を知とを得我耳其

御言葉を聞かずと雖も聖書即ち預言あど依りて明に知とを
 得ます斯て第二の奇跡に依りて神の御自を御顯しお成まし
 た其先此天地宇宙の萬物悉く皆奇跡あら不無ですが就
 中今より殆ど四千二百三十四年前に當りてノアの時代に大
 洪水を以て世に悪人を亡し給ひ其後四百五十二年を経て
 アブラハムの時代はソドムゴモラの邑に民罪惡を犯し凡百
 の汚穢淫行お充ち神の至聖其を見お堪ず神の至義其を罰
 せざるを得ず是に於て其邑を亡さんが爲め天より火と硫
 を雨して惡民を盡滅し又ヨセフを埃及に導りて國王バラ
 の夢を判せしめ將來十有四年の豊凶を預言せしめ以て神
 の宇宙を主宰し萬事を知給ふ事を知らせ是が爲にイスラエ
 史に一大關係の基礎を起し四百年の後お及でモ

七十一
その時代に於て埃及より出んと爲時お當て神のモーセの手お依て十の奇跡を現して以て其赫々たる威儀を示し終に紅海に於て埃及王及び其諸軍を亡し沙漠中お於ての殊更に種々教を垂を律令を下し四十年の久き曠野お彷徨するの間耕作産業の道あく飢餓に困む時お當て或の數萬の鳥を贈て其民の餓を充し或の岩を打て其渴を止ん及爲に水を與へ毒蛇の爲に害を受る時之を癒さん爲に醫藥を用す銅蛇を作しめて其を癒し或の天より「マナ」を降して食物と爲しめ以て其身体生命を保育し給ふを示し斯て又ヨシユヤの時代に至お及でヨルダンの大河を橋梁舟楫の便を待すして渡りエリコの邑城を軍陣の勞あく干戈お血らすして亡じ循でカナンの七強族を夷げ終に「イスラエル

の國を興し以て其大能を現し萬軍の主たるを示し而て支派を十二に分りましたが後又或の攻つ攻られつ興廢常あく存亡時あく遂に十の支族の廢滅し「ユダ」の族れみ残りよした是等の事項一切のとの皆これ神の顯し給へる奇跡にして以て顯に御自を現し給ひしあり斯て又當今に於て神御自を顯し給ふ方法に往昔舊約れ時代と少く異なる如く見ますと矢張尙種々の聖作業を以て御自を顯し給ふことどの明りです今ろの二三を撰み例証を擧て御話申さば殷鑑遠からず先支那國より始めん手進んで印度お至らん乎馳て亞弗利加亞粒比亞へ向はん手轉じて歐米へ至らん乎否退て我國の實況を觀察せん乎天下何色の國おもせよ何れの民にもせよ此神を信奉し此神お事ふる國民と之を信

率せず之に事へざる國民とを以て比較すれば誠然に顯然で
 昔時英國は或王が或時教師に向て基督敎の眞實あるを証
 さん爲ふに種々綿密實着ある確証有べられと朕の今多忙
 あれは其を聞得の暇あし依て願くば一言おして最も確實
 ある例証を示せと云給は此時其教師の我皇帝陛下に當今
 のユダヤ人を見給へど御答を申上ましたが實お是一言以
 て盡せりて御坐ます其所で御承知の如くユダヤ人の他の
 國民と異あり特別先祖の時より世々神の告給し預言と
 現し給る奇跡とに依て明か其神を知りしが故に充分に其
 神を恐る之に敬事すべさの勿論の事あれど彼等の只表面
 而已おして眞實心より之に敬事せず増々其心を頑愚にし
 種々の諸悪を行ひ神に逆ふ者と成しを以て遂に其預言に

適ひ基督上天後四十年に當て都府エルサレムの羅馬兵
 の爲お盡滅せらる己等の世界に散亂せられた是を以
 て考をば顯然ある驗を見れば從ふれ見ぬ故從の色ぬのと
 の申さるません只其從ふと從ぬとの其人々の心をして
 頑固にせず彼君子の其聞ざる所を謹み其見ざる所を怖恐
 ると云通り自ら發誠謹直おして宜く微虔の心を存べきで
 ず先普く世界の諸國を歴觀するに如何ある國が隆盛を極
 め何ある人が眞誠の幸福を得て居ます乎能眼を開て御覽
 あさい素より神を信仰する主意に此世の福祉を得の目的
 での有ませんが又佛敎の如く世を厭ひ棄べきでも有ます
 まい又支那人の如く此世の利欲而已に汲々戀々どす可
 有ますまい兎角此神お眞實心より敬事せず空く徒らふ此

世は利欲を走る人或は偽神偶像に服事する人の其希望する所の幸福を受る能ざる而已ならず反て種々の不幸に陥る者で其品行於ても邪僻れ心を放逸にし諸の不義惡願貪婪暴很妬忌凶殺争闘詭譎刻薄を盈し讒害毀謗を爲し神を怨み狎侮傲慢矜夸譏詐父母に不孝頑梗背約不情不慈を行ひ極て酒色に溺り身体天與の生命を損害し自ら滅亡を招き或は種々形像を作り遂に禽獸虫魚を禮拜す甚しきに至りては陰陽の穢りしき形像を作り其前に伏服し點として恥色あつく憫にも其身の幸福安寧を禱り以て其擁護を求めるとい何とも可申様もあき次第です彼古學者平田翁の其古史傳の首卷に此穢たる形像に就て敢て怪む色もあつく最尊き事の如く喋々述べられたが一體古學者流の僻とし

て只古傳説とさへ云へ何でも斯でも最尊き事の如く思て更み其説は是非を問はず貴重致す甚だしき迷妄です既に絶世の大家と仰れ死後於ても神と迄尊崇せらるる堂々たる翁に於てすら尙如斯の説をあす況や其下流を汲者お於てや云々も更ありて御坐ます尙又世上民間の情景を観る種々雑多の異説邪教が行ひ實に慘歎極れる弊害が多し有ます其の先づ時日れ吉凶方位卜筮百籤巫祝加持祈禱又ハ守札符呪稻荷下し神託等おて之が爲め病者有ども醫を迎ふ良薬有ども興もせず只一向に淫祠邪神を祭り已にも解もせぬ稱文を繰返し大聲を振立て鳴物を鳴し狂人の如く騒立其果に病人を死に至せます是は今更私の申迄も無ことにて既に諸新聞の記者を始め世の有識者の

常に歎息せらるゝ義にて我政府も大に意を煩ひさそす
 之實に人を殺す者と云て可ありで即ち禮記王制に假於鬼
 神時日卜筮以疑於衆者殺也と有まして恐べき害で御坐ま
 す又最も奇怪ある者の狐狸の人を迷惑させ或ハ人ハ憑き
 惱ますと云事ハて聊ハ有識者の其事を見聞して其ハ心脛
 病の一種あり怪むに足す何ぞ狐狸の業あらん乎と笑ます
 之を神道學者に問ハ實ハ狐狸などハ其能力有と云ハ佛
 者に尋るも同様の言ハて既に昔の開山とか祖師あとい其
 能力の助成に依て加持祈禱の効驗を現し爲ハ開宗の一助
 と爲せり杯と申ます此ハ強ち無とも云れますまい其故
 ハ全体世ハ所謂禍津日神(即ち魔鬼の靈)ある者ハ有まして
 種々有形無形の祿事を働キ人類を害します此ハ之眞神を

離れ邪神偶像を祭り諸惡を犯し自ら人間の位置より墮落
 し禽獸蟲魚の形像の前ハ平伏し其を神とし事ハ如き卑
 き有様ハ成果たる故遂にハ獸類にまで輕蔑せらるゝ事ハ
 有かも圖せません其証據ハ天下廣と雖も苟も眞神を心
 に堅く信仰し其教命を能遵奉する人の形情を察するハ學
 不學賢不肖の別なく凡ハ眞神ハ敬事する者の能事物の道
 理を辨へ其畏敬す可者を畏敬し其賤惡す可者を賤惡し歷
 し難き情欲を能壓し養成す可き善性を勉て養成し人を愛
 する事己を愛するガ如く己ハ仇敵する者をも待遇する事
 親愛の友の如く富貴に處ども驕奢傲慢ならず能兒子の謙
 遜を有ち財を散じて吝まず能慈善徳行の要に供し廣く衆
 小施し以て貧困を救濟す又藝能ある者の聊も名利の爲を

思す自任じて社會の鹽とあり標準と成て道德の腐敗を止
め以て社會の改良を謀り爲に人の謗や艱難を厭はず貧困
に迫るをも不義の富貴を願はず其素する所に於て能行ひ
苟も此世の富貴榮華の爲に汲々たらず只道これ勉む寢食
するも神の爲め労働するも神の爲め生死も神のため而て
願所の偏お只世人が總ての迷妄を去り罪惡より脱て疾く
正道お服歸し純良深義の民と成ん事と日お月に萬般比事
お於て神の榮光の世上お顯せん事而已です而て斯の如き
風俗お其國一般と成たる時の誠に幸福なる事先づ歐米
各國お今日の隆盛を極め開明お進歩せしり一お此に因す
る義で世上の識者お是認する所で御坐ます又近く彼の
人肉を食ひ戰闘を事とし殘忍酷烈にして鬼ヶ島と云きた

るハツイ國を御覽あさい此國も近來まで種々の邪神偶像
を禮拜し極て惡風俗の國ありしも一度基督教お傳りて從
來の迷妄を悟り先祖より信奉し來れる邪神偶像を棄て眞
神を信仰し之に敬事せし所僅か四五十年おして其國の一
變し全く善良ある民となり開化國と成ました之適然たる
例証でい有ません乎奇ある哉同じ人間にして斯の如く格
段なる區別ある事や回顧すべきも久や今を去と殆ど三
千年の其昔印度に釋迦牟尼生を支那に孔子出で此兩教
偕お東洋亞細亞お行ひを而て我日本お入し後爾來今日お
至て既お千有餘年の久きに及しも其國々の有様の古今彼
我が別なく其國民をして世の罪惡より脱せしめ諸徳を養
成し以て其教義の説所と其誠命の禁ずる所とを實行させ

而て眞誠の幸福を興ると能ざる而已ならず其民間に悪
 風行のれ種々の迷妄に充爲お困苦惡に陥るとの誠に慨
 歎の至で如斯有様の獨り我國而已の狀景ならず朝鮮支那
 安南シヤム印度及び其他總て眞神を棄て邪神偶像を禮拜
 する國民一般普通の情態です借以上陳述致たる世界萬國
 古今の狀情に就て熟々觀察比較する時の有形無形上の幸
 福禍災借に眞神の攝理賞罰する所おして神御自らを顯し
 給ふと思ひます君の如何思召ます乎和成程斯く事を解
 て御話を承まのを如何おも其通り相違の有ません俗言
 にも申通り論より証據で實お基督教國と偶像教國と比較
 して見を其の一言も無とで當時我國お於ても世間での
 基督教信者を彼是と申せど其言行お於ての誠お感心致す事

が段々有ます兎角神官僧侶の輩が此頃頻に其説教や演説
 に基督教の邪教とや邪道とやと謗り立て文盲ある小人を
 恐喝して君方の決して基督教を御聞あさるゝ家内や小供に
 も能云聞せて其所へり立寄せあさるゝ杯と云ますが其僻
 自分の言行の逆も基督教者の如く爲との能ません斯く邪
 教と云れる教が結ぶ所の結果が悉く善なる時は是も亦不
 思議千萬ある事私に正教とや良法とやと云て其結果が惡
 い者よりも寧ろ邪教と云れても其結果する所の善ある方
 宜いと思ます借何の兎もあは此間も矢張基督教を駁として
 或人の話に耶穌教の説に此世に惡魔ある者お有て人間
 を眩惑し總ての惡を行はせると云ふ神の全能全智で萬物
 を造たとして見る時矢張この惡魔をも造た者でせう然

第二十第

罪惡の
本原及
び其根
理を以
て神の
全智全
能を論
ず

る時罪の本の矢張神が御始あされた理に成ますと申す
したは何故神の惡魔を御造成して其暴行を御免し成れ
す乎又好や此惡魔ある者が有ても人間が惡を爲ぬ様お御
造り被成たら宜からうと思ひますは是も亦人間の狭き考
へるも知ませんが如何でせう何か御説が有ます乎國へ
此に就まして誰人も大に迷惑する所で既に私も久く疑
惑を抱て居ました而て世間で耶穌教を嫌ふ人々の最も着
目所で耶穌教を此所彼所と論難して夫々道理あるを覺
時直に論鋒を此点お向け此所ころ好駁場所あり卒一撃
に論破らんと難問を試むる所で之に充分ある答を爲の餘
程困難の如く見ますが又之お依て神の全能全智ある事を
大お悟りやす先づ世お罪惡災害の在り即ち惡魔は存在す

るお因じ其惡魔の因て出たる原の即ち本天使の一おて漸
次お驕慢お増長し終おの神と其權威を争ふ如お成り反逆
を企て神の造給へる物を己お從へん事を望しお故お神其
惡を痛く愁ひ憫み給て逐お之を遠け其惡を爲お任せ給ま
した此時お於て直お之を罰し亡し給さうお者ですが其
人間の量見で誠に狭き分別と申者です譬お智者の圖る所
の遠大おして所謂謀を千里の外に旋し愚者の只目前寸尺
の事而已を思て將來の計略あし人間智と雖も又利と比れ
を思ある所あり聖書お神の愚い人れ智よりも勝りとも有
まして人の如何に智惠を振ても神より與られしより他に
無く限りお有り神の全智で人間如何お事物を知極と雖
も現在をる天地萬物に過す又其生命も僅々只みを五十年

おて滅す神の莫然たる此虚空有形無形一切は事、物皆て色
 神に意に因て生滅存亡自在で永遠より永遠に萬事を圖り
 給ます故に其寛仁大度の御意より悪魔を其儘に置給り然
 とも亦自ら之を罰し給ふの時を定め置れます其の何時
 とあるを即ち此世に終の日に聖書お録て有て其間の飽ま
 で神に抗敵し神の善業を損害せんと努力するを死し給ふ
 事でするれど如何悪魔と雖も到底全能ある神お勝との能
 ません克世間おも有とすお彼愚ある悪人が徒黨を結ん
 で智慧ある賢者善人を害せんと種々ある謀計を企て一時
 の甘く巧みおも彼を計畧れ中お陥せたりと思しお其時に及
 で見おバ反て彼に圖られて是迄盡せし策畧の皆己を亡す
 所の豫備と成り我と我手で滅亡する様な解で悪魔と神と

の成果も必ず斯の如く有ませう既お聖徒パウロも是等れ
 事を思旋して嗚呼神の智と識の富の深かお其法度の測り
 難く其踪跡の索ね難し孰乎主の心を知し孰か彼と共に議
 る事を爲しやと申せられた故に私共の如き智もあく識もな
 き不徳不義なる者お猥に狹考や不善思慮を以て兎や角と
 神に御上を議り奉るの最も恐き事おて只阿那加志古
 阿那多布登と敬ひ置べきで神お世に悪魔を置給ふ事の必
 す深き御心の有とせうと私お信認致ます倍以上の世に
 悪魔の出し原由と其世お在る所以を些か述ましたが尙前
 説を明お爲がため是より人類お惡魔れ誘惑お因て罪惡お
 染る原由と其利害如何に就て少くお話申せう御詳知の
 通り元始に神お天地萬物を御造り成れ人類の始祖たるア

ダムエハに是等を従へ統治するの權威を御與ふなり此時
 に於て乃至善且義ある者で有ました其故人の靈性の
 即ち神の肖に像られ誠お尊く萬物に勝れて居りしが一
 惡魔の誘惑する所と成てより其完全なる貴き靈性を毀損
 し爾後不完全なる者と成り取捨撰擇の權も其合宜を失ひ
 従つて痛苦艱難疾病憂愁煩勞及び其他百般の禍災が世
 に起り是に於て惡魔の其隙に乘じ靈長たる人類を我配下
 にお歸せしめ自ら此世の王と成り神の善業を破損し善惡の
 争ひを人間界お起しました此變亂たる事を我等人間は考
 より見るとさの誠お歎かひしき事おて以前に儘おて有し
 ろら最も幸福の事有ましたらうと思ます其故お彼れ老
 子も道德經第十八章に大道が廢れたる故に仁義あると云

ふ名が起り親子兄弟夫婦の六親が不和とありしが故に幸
 慈みと云ふ教が始りたる者おて以前の大道が廢さず存
 して有さへすれを斯様ある仁義五常と云ふ教の無用の
 者とあると歎じて有ますが素より惡魔の此れ大道の廢た
 るを以つて我が望みを既に達せりと思へとも神の其變亂
 を以て又以前の有様よりも一層善美と成し給ひました彼
 の諺お毒藥變じて良藥と成と申通り却て之に因て愈々神
 の大能お顯はる其計畫の妙巧美術の細奥なる事お解り之
 を譬バ巧者ある畫工お書たる名畫を見て其妙巧を妬み其
 を毀損せんが爲に奸惡ある畫人が或部分へ墨を点せし所
 反て其お益々美妙を呈したるが如く御坐ます儲て前に申
 上たる如く其始め人性の純善ある者ありしが後變て惡あ

る者と成しとの云へ恰も金玉が變て瓦石と成し如く全く
 變化せりとの申されません世も人性の善惡如何を論ずる
 事の實久矣とで先づ性善と云方が勝利を得て居様も見
 え然るに近來耶穌教が入來りて人性の惡ありと説様に聞
 えずす故此の聖人の教と異なる如く思まするれと其も未
 だ充分なる見解との申されません或儒家の語も人性の善
 惡を論ずると先王の道も有るとし孔子も亦言す孟軻荀
 卿の説出しより學者初て議論を生ず孟子の則ち性善と云
 ひ荀子の則ち性惡と云ひ告子の性善も性惡も無不善と云ひ或
 の性善あり性有不善と揚雄の性善惡混すと謂ひ王充の定
 て善あり有惡と謂ひ韓愈の性有三品と云ひ近世又性の人
 々別と云者あり皆其可言れ理を成て其説を持す今其得失

を辨知するお違あらずと有又其終に臨で然るお孟荀以來
 多く聖人の意外に出て將に必ず性上お於て以て定論を成
 んとする者乃ち知皆無益れ論なりと家田虎が地進有まして
 人性は善惡を兎や角と論ずるの實に無益の事で何の益も
 も立ません假令人性本善にもお色惡もあを現在に状態
 を以て觀ときん決して善人あり義人もあを申されません
 殘念おがら其行為と思慮を以て云ときん矢張惡です然
 せも荀子あどの説の如く全く惡而已で有ません能其性
 を察すれば幸おして尙善の存する者有ますお之も亦前に
 申された如く純全無缺の善お非ずして不完全ある者です
 故に其力の弱く微あり而て弱く微ありとの雖とも能く事
 物は是非を判し其善惡を識別す苟も人たる者誰か此心を

有ざる者有んや其所で此心を存し之を養成する時人間の本分に適ひ天に事る道を得て萬般の幸福之より生じ人間は眞價を達し本然の性に復歸する事あり之を反して此心を存せず之を養成せず之を逆ひ私慾の趣く儘に任せ萬般の禍害從て生じ愈々人間の價直を失ひ天意に悖り倍々不幸に墮落致します古語に禍福門あし只人の招く所との蓋し此謂でせう若智能衆物に勝る貴重なる自由は權利を有する此人間にして獸類の如く此天法即ち本心無りせば其形情の如何で有ませう實に神の智能の大なる者です神が永遠に於て賞罰を正ふし人類に無上の幸福を與んとならを必ずや此世に於て充分ある試練を行ひ神を畏れず其本心を欺き眞誠の幸福を欲せず倍々天道に逆者として

神を畏る神の與んと望み給ふ所にして又人間の靈魂が渴望する永遠の幸福を得んと欲し勉て天意のある所に従ひ本心の指示をる所を行ふ者とを撰別すべきで御坐す譬を啞者が人を誘らずと譽る能はず手の動ぬ者が人を撃ぬとて譽る能はず一物ある所に居て盜せぬとて譽る能はず何故あるべき之を爲ざるに非ず能ざるが故です誘も撃も盜も皆其自由を成人にして其を爲ざるは神意に違ふ時之を又己情に於て如何に欲する事あるも神意に違ふ時之を爲す其情を壓るの神を畏れ之に従ふ者です凡る善事を行は私情に於て苦く惡事を行へ心眞心に於て樂からず人を欺き得るも我眞心を欺く能はず過失を悔改て後眞心安ん感じ過失を避て再び行す眞心茲に於て喜樂す然るを心悉

く之ハ反す斯の如く此試練ハ遇てて善ハ愈々善惡ハ愈々
 悪ト成べし既にパウロハ羅馬書ハ録して我ねがふ所の
 善ハ之を行ハず反て願ざる所の惡ハ之を行へり若我願さ
 る所を行ふとき之を行ふ者ハ我に非ず我に居所の罪な
 り是故に我善を行ハんと欲ふ時ハ惡の我に居るのハ法
 あるを覺ゆ蓋わ色内ある人即ち良心に就てハ神の律法を
 樂めども我肢體に他の法(情慾の私)ありて我心の法と戰ひ
 我を擧にして我肢體中に居罪の法に従ハするを悟れり
 噫我困苦人ある哉此死の體より我を救ふ者ハ誰ぞやと
 申ました此今人間の眞情で神が人間をして眞誠の幸福安
 寧を欲望するの念を發揚せしめんが爲に罪惡なる者を世
 に御置き成れ此惡の爲ハ良心が責られ其苦難ハ依て己の

弱を悟り大能者の救助を求むるに念を起さしめ給ひます
 故ハ神ハ罪惡を以て善を勸勵するの機具と成給ました一
 寸考て御覽あさい何おもあき平常の時人より金を與らる
 とのと極難澁の時與らると同じ金高で孰が其恩惠を深
 く感心します乎必ず平生無事の時よりも多難困苦極まざる
 時の方が眞實辱く感ませう恰好其の如く此世の罪惡ある
 故に因て深く神の恩を感ぜしめ愈々神と慕の念を長ぜしむ
 故に罪惡の世に存するハ第一人性を養成練磨せんが爲あ
 り第二其を練磨養成するを以て永遠に於て賞罰を正し幸
 福を得させんが爲あり第三人間をして其眞誠ハ幸福を希
 望するの念を發揚せしめんが爲なり第四此希望を成就せ
 んに己の力に依らずして必ず神なる大能者ハ依頼すべき

を覺せんが爲あり何と此通りお考て觀心誠お奇妙ある仕
 組での有ません乎よき神の全智全能で御坐まして惡より
 善を生じ給ふと聖徒オーガステンダ申ましたも此事で有
 ます和成程人間たる私の心中を深く察し委く探索致しま
 すれば本心の惡で有ません故に惡を行を願はず惡を好み
 ません而て我本心に逆ひて其惡を願ひ好む所の者の我肉
 に在ことも明か御坐ます其所では本心の零ぼ其善惡を
 是非する力の有と其を決行するの力あきを以て完全の者
 ありざる事も亦明瞭です故お善とい云難く惡あるも苟
 子グ云所の惡に非ずして不完全ある義と承まのるは實
 に其通に相違有ません私の心既に然りと致ます畢竟世中
 に種々れ道あるも此不完全ある良心を教養し勢力を與て

其力を發揚せしむるお在ませう然るお其義を爲し得ずし
 て只徒らお銘々の道を以て天下第一の正道とし正教とし
 て種々ある議論を以て我教に至理じや我教の古より傳り
 たる聖教じやのと其教の尊を云離し其功能を揚言し我一
 に利を得んと騷立のの恰も彼賣藥師が其藥を賣んとて大
 聲を發てエー本家の大坂淡路町某屋家傳の道徳丸痛腹お
 の心惱病頭痛に目眩惑立暗み其他一切功能の經文書籍に
 事明細サアサア御買御買と勧める故皆人が買て盲が用を
 益々盲とあり頭痛も腹痛も少も癒ません又可笑事の賣
 藥師自ら折節腹痛する時の人の居ぬ蔭の方で腹を押して顔
 を醜め嗚呼痛々何か之を癒す良薬の有まいか嗚呼苦し
 自分ぶ此藥を人に賣あぶら他へ薬買に行も外聞悪く又此

薬の名目にも係るしと人の見ぬ所で苦んで居ると同談
 ですが併し憂ひ内に在る色外に現るると申す如く其痛
 腹を抱へ我慢をして我慢を賣んが爲に其苦惱を隠す
 其行お現れて人々漸次に其口前に乗ず買た薬も程好く
 断て返す様お段々成て來ませう借何の兎もあは國君私も
 實に此心痛に殆んど困難致して居り何しても所詮癒さる
 術なく此而已に此世に於て仕方無者じやと思ひ断念て
 居ましたが如何にも神の全能全智に在して罪惡を以て善
 を生じ善を以て惡に勝り給ふ事の誠お驚歎の御行
 爲で到底も人間の智謀の企て及ばぬ所です又神の至仁と
 やら承の色を何ぞして此苦痛を癒され度存じますか此お
 就て委し御説が有ます手國左様で御坐ます神の全能全智

第三十

救道に依て神の仁慈の愛の神の慈を給ふ

ある而已ならず加ふるに又仁愛慈悲の御方で公義正道を
 以て萬有を治理覆育し給ひ斯の如き罪惡お充たる人類の
 滅亡するを好み給はず惡より轉へりて救ひせん事を望み
 給ふとの慈悲深き母親が其子を思ふよりも甚だしく即ち
 聖書に記して婦豈忘其哺乳乳之子而不恤己胎所生之子乎彼
 猶可忘之然我必不忘爾也と有まして時として人間其子
 を忘れて思ひぬ時もあるアダムが罪を犯して以來人世の罪惡
 彼の人類は始祖あるアダムが罪を犯して以來人世の罪惡
 の爲お困苦難と免れず人類の皆お爲に死亡する者と
 成しを以て深く憫み之を挽回するの法を御定めに成り其
 をアダムとエバに御約束爲さる後世必ず一救者を降して
 憫ての人類を此罪惡より救ひ後來必ず惡魔の姦計をして

悉く徒勞お歸せしめ惡魔をして自滅お至しむ可と云給ま
 した其所で此約束を信じ此教主お依頼する者の救はれて
 心に安慰を受云お云いぬ喜樂と希望を與られ又己の行
 爲の如何を省みず徒に諸の不善を行ひ心を放逸にして諸
 惡を爲もの勿論の事また此約束を信せず此教主に依
 せず己の能力か徳行に依て救ひを安慰を受んと欲する者
 の罪に定られ如何ある人にもあま常住坐臥憂と懼れにて
 心痛に堪えせん斯様に私お申すを定て或人の否ナニ
 君子の不愛不懼と云語お有れを君子に愛も懼も有まい
 と云ませうが若し自ら眞實内お願みて痛ましからず懼を
 も無あれを其の確お其人の心の漸々惡に慣て誠の感覺が
 無あつて罪の罪たるを覺ぬ故に痛も知す憂があるいで懼

ぬのも彼盲人お蛇に懼ぬ如く其人の心の眼が眩で前に懼
 るべき物お無て恐れぬので無く見えぬ故懼をぬれども是
 での眞の不愛不懼での有ません斯の如き人の偽君子です
 又聖人の教お依り其道を行へん其で人間の本分を盡し從
 て心内の喜樂も得らるべし何ぞ教主を要せんやと思ふ人
 も有ませずれども是の又思ひざるの甚だしき者で成程其教に
 依り其道を行へん人間の本分お盡せ從て喜樂も自然と生
 じませうお併し其道の行ひぬ何した者でせう既に其
 道を立て其教を速られたる聖人の有様の如何で有ました
 乎張子の作者篇にも可願可欲雖聖人之知不越下盡其才以勉
 焉而已故君子之道四雖孔子自謂未能博施濟衆脩己安百姓
 堯舜病諸是知人能有願有欲不能窮其願欲一作者篇と論じて

有また論語にも孔子曰く徳の脩らざる學の講ぜざる義を
聞て徒ると能のざる不善改むると能のす是我憂也と有
す之を以て觀れを聖人の其爲べきの道を知と雖も其を
遂げ盡すの能力お乏しきを歎せられたる事明か御坐
す斯して彼して此すれば其で能ると云の未だ爲ざる以
前の目算で書物を叩て理屈を云て試れば能さうに思
ても倍て實地に掛れば何も能ぬ所が有ます聖人等の書
で理屈を云のす實地に當て試られ而て其を曉りて歎息
られた者で今の學者先生も若し實地に當て能く彼の格
致知の實驗をせば忽然心中に憂と懼を生じませう此
懼を生じ其疾痛を癒されん事を欲して救道を求るなら
令此人未だ聖賢の道を學はずと謂と雖も私の必ず此人

を指して學たりと申ませう夫れ學問の道他あし其放心を
求むるに在と申通り種々様々の學課多しと雖も畢竟
まば己を知り上帝を知り當來の果を以て未來の有様を測
知り懼べきを懼れ慎むべきを慎んで此世を渡るに過ませ
ん然るを多く其學問お驕り智恵お眩惑さる神を懼るす
己を頼として此世を渡る者が有ますれを其靈魂が體軀を
離るる時ハ誠お心ぼろき者で斯の如き人の臨終に能見る
事です之れ平素其身體強壯の日に於て本心の願欲する所
を壓し私慾お従て靈の望を輕んぜしが故です斯て又佛道
を脩し其引導に依て其身を清潔にし來世の幸福を得んと
欲する者も有りて此の祖先以來この道に於て往生せし故
我も此道に依て往生せば其にて充分なりと思ひ兎角舊

習に馴み何でも彼でも是迄は通りさへ守れを好として動
ぬ人々有ますが斯云ふ人の佛の實意を知らず事物を推究
し道理を發明する氣象も乏く眞實に己の罪の如何を知ら
ず未來の賞罰を懼るゝは念薄き者です思ふに今日佛道を
信する人にして釋迦牟尼程此世の罪惡を心に認め未來の
懼れを抱かむ或の眞實の救道を得るに近からんか釋迦の
此世の有様を觀て甚だ愛ひ恐色此世の困苦の甚だしき所
にて到底此世に於ては眞に幸福を得られぬ而已あらず却
て永遠に困苦を受るの因を起す故に眞誠の幸福を得んと
欲せば此世に生れて來ぬ様にするより外お手段あしと思
ひ其方法を示して先づ此世へ生れて來る原因の此世に居
る間お種々此世の事を思ふ故に其念の縁と成て又世に

生れて來る者あれば宜く其慾念を斷絶せねば成す其慾念
を斷絶するに妻子眷屬を棄て出家せねば成らずとし其
等の者の厭ふべきを説て佛曰人墜於妻子寶宅之患甚於牢
獄桎梏狼檻と彼の四十二章經に有ました此世に生死成壞
して無常あるの即ち因縁因果の理法おより輪廻流轉する
者あるに宜く道を得て之を離脱せよ此様ある穢土火宅五濁
惡世衆生濁命濁此の五濁なり長生して困苦を嘗るの無智は極な
り故に此世れ一切を棄て出世間無漏の學を講じ此世を去
り死生の苦難を脱色安樂を得るの用意をせよと教て人類
を罪惡より救はんと致ましたが如何様この世の困苦の存
在する所にて實に盛衰常なく生死窮まり無く頼み無の釋
迦の教を待すして誰人も知所で其お相違有ません又釋迦

無^ひ尼^にの教^{がう}の如^{ごと}く致^{いた}たら罪^{つみ}惡^をを遁^{のが}れ苦^{くる}難^{がた}を脱^{だつ}し此^{この}世^よの塵^{ちり}穢^{けが}れを受^うずして此^{この}身^みを清^{せい}淨^{じやう}に有^あり遂^{つい}に所謂^{いはゆる}不生^{ふぜ}不^ふ滅^{めつ}無^む爲^むの樂^{たのしみ}を永^{なが}く受^うるに至^{いた}るかも圖^{はか}られませんが此^{この}の出^{あつ}離^り解^げ脱^{だつ}の道^{みち}も餘^{あま}り穩^{ゆた}當^あでなく畢^{ひつ}竟^{やう}すまば即^{すなは}ち欲^{そのみ}深^み三^{さん}其^{その}身^み而^{して}亂^{らん}大^{だい}倫^{りん}ものど成^{なり}ませうが先^ま何^{なに}の兎^うもあまき斯^かの如^{ごと}く皆^{みな}古^{いにしへ}の聖^{せい}人^{じん}賢^{けん}者^{しや}と稱^{たう}れたる人^{ひと}々^々の人世^{にんせい}の邪^{じや}惡^{あく}あるを曉^{さと}りし事^{こと}の明^あおし
て義^ぎしき人^{ひと}なれを義^ぎしき程^{ほど}愈^い々^々自^{みづか}ら己^{おのれ}を省^{かへ}みて少^{すこ}の過^{あや}失^{まち}をも悔^{くひ}改^{あらため}て其^{その}身^みを潔^{きよ}くし徳^{とく}お進^{すす}んど致^{いた}す之^{これ}に依^たつて考^{かんが}ふ
まを古^{いにしへ}の聖^{せい}賢^{けん}方^{かた}の皆^{みな}救^{きう}主^{しゆ}を待^{まち}望^{のぞ}し者^{もの}と申^ましても可^いと思^{おも}ひま
す何^{なに}あれを皆^{みな}救^{きう}ひの道^{みち}を求^{もと}めましたあれと遂^{つい}にお完^{かん}全^{ぜん}なる
道^{みち}を得^える能^{あた}はずして仕^{つか}方^{かた}なしお自^{みづか}ら工^く夫^{ふう}して先^ま大^{だい}概^{がい}如^{ごと}斯^{ごと}に
爲^なて行^ゆは善^{ぜん}らんと定^{さだ}たる者^{もの}にて彌^い々^々確^{たしか}然^{しか}と云^いふとの自^{みづか}ら

も定^{さだ}め難^{がた}く有^あましたろうと存^{ぞん}じます其^{その}証^{しやう}據^この其人^{そのひと}々^々の最^{さい}後^ご
即^{すなは}ち死^しする時^{とき}の様^{よう}子^こと今^{こん}日^{にち}其^{その}道^{みち}々^々を能^{よく}探^{たん}索^{さく}すまば明^あるに
知^しれます其^{その}所^{ところ}で此^{この}不^ふ完^{かん}全^{ぜん}なる道^{みち}々^々を譬^{たと}へて見^みを誠^{まこと}の救^{きう}道^{みち}の
離^り形^{かたち}めて此^{この}離^り形^{かたち}の不^ふ完^{かん}全^{ぜん}ある教^{きやう}の實^{じつ}物^{ぶつ}ある完^{かん}全^{ぜん}の教^{きやう}が成^{なり}
たる以^い上^{じやう}の無^む用^{よう}ものと成^{なり}べきで聖^{せい}書^{しよ}に完^{かん}全^{ぜん}者^{もの}來^{きた}る時^{とき}の不^ふ
完^{かん}全^{ぜん}者^{もの}廢^たるべしと有^あまして我^{われ}國^{こく}お從^じ來^{らい}行^ゆれたる神^{かん}儒^{にゆ}佛^{ぶつ}
の三^{さん}道^{だう}の完^{かん}全^{ぜん}無^む缺^{けつ}の教^{きやう}道^{みち}での有^あません其^{その}証^{しやう}據^この凡^{およ}ろ物^{もの}の
數^{かず}集^{あつ}まは強く堅^{けん}固^こある者^{もの}めて彼^かれ鼎^{てい}足^{そく}の三^{さん}本^{ほん}にて確^{たしか}手^て
立^たて用^{よう}を爲^なす神^{かん}儒^{にゆ}佛^{ぶつ}の不^ふ完^{かん}全^{ぜん}なる三^{さん}教^{きやう}の仮^{かり}令^{れい}一^{いつ}致^ちするも
到底^{たいてい}此^{この}烟^{えん}々^々たる人^{じん}怨^{おん}の火^か中^{ちゆう}に立^たて用^{よう}を爲^なす能^{でき}ません即^{すなは}
ち是^{こゝ}等^らの道^{みち}々^々の到^{いた}底^{てい}人^{じん}世^{せい}を救^{きう}て真^{まこと}誠^{せい}の幸^{こう}福^{ふく}を與^{あた}ふる事^{こと}能^{あた}
はず反^{かへ}て今^{こん}日^{にち}より視^みを智^ち識^{しき}上^{じやう}及び風^{ふう}俗^{ぞく}人^{じん}情^{じやう}等^らお幾^い分^{ぶん}か

弊害を與へり然も是等の宗教が我國に於て少も益する所
ありしと云に有す彼の暗夜あ於て月星は光輝地上を
照し明を與るが如く人智の暗夜ある時に當て光明を與へ
し事又少くあらず例へ神道の祖先を禮拜するを敬て武を
重し儒道の仁義五常を基として文を重し佛道の罪惡を説
て來世を重するが如く各自其親愛する所あ於て僻す蓋し
人の決して先祖を拜禮する而已を以て善とす可らず仁義五
常而已あて善とす可に非ず罪惡を説來世を重する而已を
以て善とす可に非ず是等を兼備して全善と云つ可
御坐ますが神道にて祖先を禮拜するを改めて先祖の先祖
たる大本に歸し之を敬拜し其命令なる五倫五常を守り罪
惡に克て來世の望を有ち此世を渡る事を爲し既往將來の

過失を救濟する所の教主に依頼するを得ば之を完全無缺
の道と云つ可し然るも我國の人多くの我國に先祖よ
り傳りたる宗教あるを以て他に教の要ぬと云へども私
却て然らず我國に從來神儒佛ありし故に基督の眞實ある
を知り之を信する事を得ます其故の聖書に記して神昔の
多の區別を爲し多の方を以て預言者おより列祖お告給し
が此末日に其子(即ち基督)に託て我儕お告給へりと有ま
してこの基督教を奉ずる時の神儒佛ある假教を總て全ふ
し生お行ひ死して安く顯幽共に恐るゝ所あし前にも
度々申ました如く人間の思慮と神の聖意との同一で有ま
せん人間の間でも己の德行を以て救ひを得んと欲すを
神の疾より其事の爲し難きを知給ひて前お申上たる如く

救の道を御定めお成り信仰に依て我等を義とし計ての罪
 惡より救ひ出さんと思召ぶ故に聖書に銘して義人の信仰
 に依て生べしと在ます然るを古より多くの己の自力を以
 て救を得んと爲しに全く神の御性質を知ざりしに因りま
 す神の御性質に至て正且義あれども又至て仁愛慈悲の聖
 徳を備へ給ふが故に我等を深く憫憐み救ひ給ふ事にて此
 救の道を覺らすして只に神の正且義なるを仰ぎ觀れを我
 等人類の爲おん最も恐懼べき責罰者と成の他あく孔子の
 如き聖人と雖ども其前に立ちしに戰慄し恐懼せねを成ま
 せん然と仁愛慈悲の聖徳より仰ぎ觀れを我等れ如き不正
 不義の小人惡人といへども幸にして神の御膝下に近接て
 慈悲の父全能の神よと稱ふる事を得て親子の親愛を蒙り

ます而て此聖徳の何に依て彰さるゝとあれば即ち救道お
 依て彰されまます故お救道の神の性質を全く現す眼鏡れ如
 き者にて此救の道ある眼鏡を用ひされれば決して神の性質
 を全く窺ひ知こと能はずサルヌ一氏お云る語に神の御性
 質の黙示特別に人類に教示し給ふ所の者也依て現さるゝ他
 僅の者にて救の道の恰も眞實の美妙を現し「ガラス」れ如
 し彼の太陽の光線お於る之を一目すれを只一様にして別
 ち難き光の如く其中お最も美麗ある數種の色を含ど雖も
 我等の肉眼に更に現さず隠るゝ也然と一たび三角形の
 「ガラス」を取て之に光線を影し見るときに最も驚くべき美
 妙數色を現しす如く我等救の道なる「ガラス」を以て神の
 御性格を仰ぎ觀れを從來隠たる聖徳の數種即ち公義ある

事慈悲ある事聖ある事純潔ある事仁愛なる事等の聖徳を
視ることを得べしと有ます其所で此聖徳のうち最も大
なる者の仁愛慈悲おして聖書に夫れ神の其生み給へる獨子
即ち基督を賜ふ程に世の人を愛し給へり此の凡て彼を信
する者おの亡ぶる事あくして永生を受しめんが爲なりと
有ますが何と廣大ある愛での有ません乎随分世れ中に
其恩義ある人れ爲に我が一命を捨て以前の恩義お報ゆ
る事をする人も間々有ますれと現在我の仇敵の爲に己の
生命を捨て其仇敵を救ふ者の有ますや我國の昔より忠
義の爲おの可愛我が子を惜まざるを御主の身代とあして
殺したり或の自ら甘じて死したる事と最も其例多く有
て其中にも彼の有名ある先代執の政岡が千松れ死骸を抱

きて悲歎の言葉に三千世界の子を持た親の心情の皆同じ
毒あるもの食ふと教る母のわごと毒と察たなら毒味して死
でくれいと云ふ様な酷い不情母親が又と世界に有かい
アと歎きましたお是のこそ大恩ある主君の御爲お其生命
を捨たる義で有ますお其色ですら可愛我が子を殺すの親
の身として實に忍び難き事有ます然るを神の己に向て
罪を作り悪を爲せる人間を救はんが爲に最も愛する其獨
子を此世お降し我等の爲に罪の贖を成させ給ふとの誠お
大ある慈愛での有ません乎る故お又聖書お神の之お依
て其愛を彰し給ふと記し有まして眞の基督信者たる者
の皆みれ御願を深く信じこの鴻大ある恩愛に酬され諸悪
を悔改め善を行ひ身を脩むる事を得るのおて更に他意あ

る事ありし故に之を神の奥義と申すを偕て以上陳述せし所
 を總る時の上聖人君子を始め凡て世上の人類たる者の既
 お罪惡過失ある者にして之が爲め良心常お安んず之
 が責罰を免るを知らず救者を求むるの念存する事
 の明ある事と又神の仁慈悲の聖徳あるを以て一の救道
 を開き人類の罪惡を免し之を救ふて良心お安んずを與へ其
 存念に満足を得させ給ふと云ふ事は大要を申上ました先
 づ今日茲お談を止めて何れ此次に基督の果して上帝天
 父の降し給ひし萬世萬民に救主あるや否やを探究致て見
 ませう或人れ厭お。
 雲とのみ見しハ麗れ心おて。花とけ。登るみよしれと山。
 明烏迷の目醒 耶穌大意上卷終

明治十八年十月廿七日御届
 同十九年十二月 出版

兵庫縣神戸區元町六丁目
 番外拾八番地寄留
 長野縣平民
 著述並出版人

水野 功
 横濱本町通り七拾七番館
 倫敦聖教書類會社

大阪賣元
 大坂土佐堀三丁目八番地
 同 福音社

賣 捌 書 林

東京築地

長

坂

東京銀坐三丁目二番地

十字屋書鋪

同馬喰町三丁目三番地

洗心堂

同芝區三鳥町拾番地

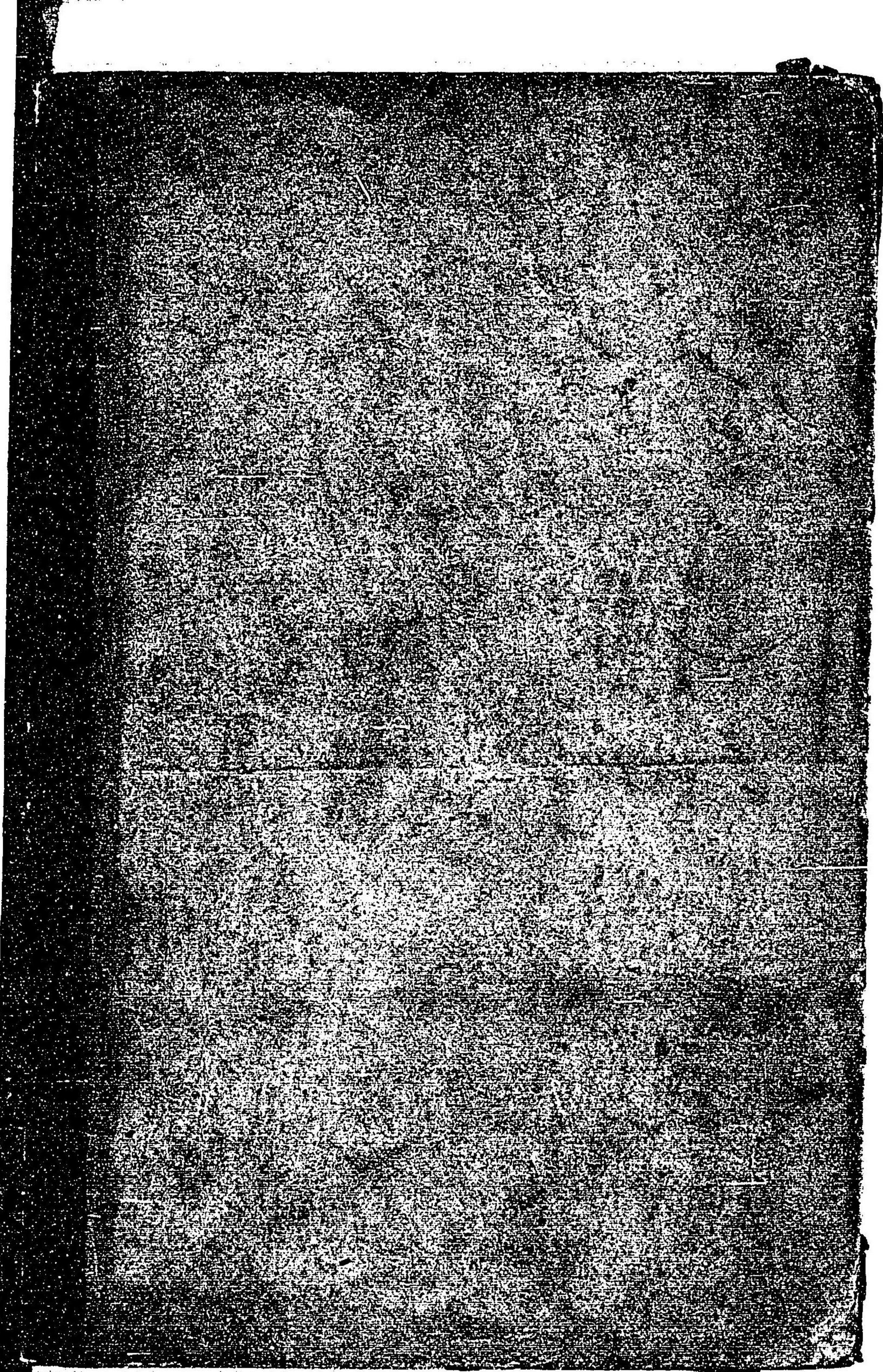
甘泉堂
和泉屋
山中市兵衛

常州多賀郡神岡

書肆吉川忠章

24
/
117





特 18

868

020210-000-4

特 18-868

明鳥迷の目醒 - 耶蘇教大意 - 上卷

水野 功 / 著

M19

ABI-0009

